富田林市埋蔵文化財調査報告書24

平成５年度

富田林市内遺跡群発掘調査概要

1994.3

富田林市教育委員会

はじめに

富田林市は大阪府の南東部約20kmに位置する面積39.67km²の自然と歴史に恵まれたまちで、「石川にはぐくまれた河内文化のさと－富田林」を将来像として総合的なまちづくりを推進しています。

市域の中心を南北に流れる石川両岸の平野部では古くから集落が開け、南部では雄大な金剛・葛城連峰を背景に、緑豊かな丘陵と美しい田園風景が調和を保ち、自然景観にあふれています。

一方、近年の高度成長を背景とした大阪都市部の人口急増のもとで、大小の住宅地開発が行われ、最近では住宅都市として生まれ変わろうとしています。こうした状況のもとで、遺跡の発見もあいつぎ、その数も160ヶ所を越えるものとなっています。

本書は、平成５年度に実施しました個人住宅を中心とした発掘調査の概要報告書です。なかでも、甲田南遺跡では弥生時代の住居址から大阪府下でも出土例の少ない板状鉄斧が出土するという機会に恵まれ、遺跡の性格を明確にする貴重なてがかりを得ることができました。

最後になりましたが、調査の実施並びに本書の作成にあたり、ご協力を賜りました方々に厚くお礼申し上げます。

平成６年３月

富田林教育委員会

教育長 清水冨夫

例　　言

1．本書は、富田林市教育委員会が平成５年度に国庫および府費の補助を受けて実施した緊急発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、富田林市教育委員会社会教育課、中辻亘・今西淳・粟田薫を担当者とし、平成５年４月１日に着手し、平成６年３月３１日に終了した。

3．調査を実施するにあたり、置田雅昭氏・桑原久男氏（天理大学）、小林義孝氏、岩瀬透氏、山田隆一氏（大阪府教育委員会）、西山昌孝氏（千早赤阪村教育委員会）、森山義博氏（大阪府立富田林高等学校）から格別の助言や援助を受けた。ここに記して感謝します。

4．本書の執筆は、各々文末に記すものがあたった。なお、山田隆一氏からは甲田南遺跡出土の板状鉄斧に関する玉稿をいただいた。本書の編集は中辻・粟田が行った。

発掘調査参加者

＜調　査　員＞　田川友美・中野篤史

＜調査補助員＞　川合和代・北野千穂・頓宮貴美恵・平方扶左子・森田真道

＜作　業　員＞　岩井節子・岩瀬訓子・小田信代・中川正博・西澤寿子・藤丸祐子・前野美智子・矢野早苗・山本節子

本　文　目　次

はじめに
例　　言
Ⅰ　平成５年度調査概要……1
Ⅱ　錦織南遺跡……2
　１．層序……2
　２．遺構……2
　３．まとめ……4
Ⅲ　甲田南遺跡……5
　１．層序……6
　２．遺構……6
　３．遺物……14
　４．まとめ……21
　５．甲田南遺跡出土の鉄斧について……24
Ⅳ　中野遺跡……29
　１．層序……31
　２．遺構……31
　３．遺物……32
　４．まとめ……36
Ⅴ　錦聖遺跡……38
　１．第３トレンチ……40
　２．第４トレンチ……41
　３．第５トレンチ……42
　４．第６トレンチ……43
　５．遺物……45
　６．まとめ……46
Ⅵ　甲田遺跡……47
　１．層序……48
　２．遺構……48
　３．まとめ……49

挿図目次

挿図1　錦織南遺跡発掘調査地位置図……3
挿図2　遺構平面・断面図……4
挿図3　甲田南遺跡発掘調査地位置図……5
挿図4　遺構平面(第1面、第2面)・断面図…7～8
挿図5　遺構平面図（第3面）……11～12
挿図6　竪穴住居址2出土遺物……15
挿図7　包含層・側溝出土土器……18
挿図8　包含層・測溝出土紡錘車、石器…20
挿図9　甲田南遺跡出土の板状鉄斧……24
挿図10　甲田南鉄斧Aの共伴遺物
（註1文献より転載）……25
挿図11　近畿地方出土鉄斧の法量……27
挿図12　中野遺跡発掘調査地位置図……29
挿図13　調査区位置図……30
挿図14　遺構平面・断面図……31
挿図15　溝出土土器……33
挿図16　溝出土石器……34
挿図17　溝出土石器……35
挿図18　錦聖遺跡発掘調査地位置図……38
挿図19　調査区位置図……39
挿図20　第3トレンチ平面図……40
挿図21　第4トレンチ平面図……41
挿図22　第5トレンチ平面図……43
挿図23　第6トレンチ平面図……44
挿図24　第4・第5トレンチ出土遺物……45
挿図25　甲田遺跡発掘調査地位置図……47
挿図26　調査区位置図……48
挿図27　調査区平面図……49

表目次

表1　発掘調査一覧表……1
表2　甲田南遺跡（第3面）遺構一覧表…13
表3　甲田南遺跡出土土器観察表……22～23
表4　甲田南遺跡出土紡錘車観察表……23
表5　甲田南遺跡出土石器観察表……23
表6　近畿地方の弥生時代鉄斧時期別一覧表……26
表7　中野遺跡出土土器観察表……37
表8　中野遺跡出土石器観察表……37
表9　錦聖遺跡出土土器観察表……46

図版目次

図版1（上）錦織南遺跡　調査区全景　南から
（下）錦織南遺跡　北壁断面　南から
図版2（上）甲田南遺跡 第1面土壙全景 西から
（下）甲田南遺跡　同上　南から
図版3（上）甲田南遺跡　第2面全景　西から
（下）甲田南遺跡　同上　東から
図版4（上）甲田南遺跡 調査区西半部全景 北西から
（下）甲田南遺跡 竪穴住居址1，2全景 西から
図版5（上）甲田南遺跡 竪穴住居址1，2全景 南東から
（下）甲田南遺跡 板状鉄斧出土状況 西から
図版6（上）甲田南遺跡　第3面全景　東から
（下）甲田南遺跡　同上　西から
図版7（上）中野遺跡　調査区全景　南から
（下）中野遺跡　北壁断面　南西から
図版8（上）錦聖遺跡 第3トレンチ全景 北から
（下）錦聖遺跡 第4トレンチ全景 東から
図版9（上）錦聖遺跡 第5トレンチ全景 北から
（下）錦聖遺跡 第6トレンチ全景 西から
図版10（上）甲田遺跡　調査区全景　西から
（下）甲田遺跡　同上　北から
図版11　甲田南遺跡出土遺物
図版12　甲田南遺跡出土鉄斧
図版13　中野遺跡・錦聖遺跡出土遺物

Ⅰ．平成５年度調査概要

No.	調査期間	遺跡名	位置	申請者	規模（m²）	用途	備考
1	5.5.31～6.1	新家遺跡	新家 266－２の一部	北野　市郎	68m²	個人住宅	浄化槽部分2.1×1.4mを人力掘削 ピット３を検出する
2	5.6.3～6.4	寺内町遺跡	富田林町 79－１の一部	溝口　勝久	75m²	個人住宅	浄化槽部分2.4×1.8mを人力掘削 ピット３土壙１を検出する
3	5.7.1～7.5	毛人谷遺跡	寿町２丁目 321－１	徳原　俊	133m²	個人住宅	浄化槽部分２×２mを人力掘削 溝の一部を検出
4	5.7.1～7.5	毛人谷遺跡	寿町２丁目 321－12	藤本　雅也	100m²	個人住宅	浄化槽部分２×２mを人力掘削 遺構・遺物なし
5	5.7.12	新家遺跡	甲田169	内田　一	28m²	個人住宅	浄化槽部分１×２mを人力掘削 遺構・遺物なし
6	5.7.27～7.29	錦織南遺跡	錦織899－１	塔本　晃弘	184m²	個人住宅	本書掲載
7	5.8.4～8.6	錦織遺跡	錦織277	松本　四郎 松本　明人	239m²	個人住宅	浄化槽部分２×１mを人力掘削 土壙１を検出
8	5.9.27～10.26	甲田南遺跡	甲田76－１	杉本　修一	904m²	共同住宅	本書掲載
9	5.10.1	中野北遺跡	中野町３丁目 857－４	西條佳代子	246m²	個人住宅	浄化槽部分１×２mを人力掘削 遺構・遺物なし
10	5.10.21	毛人谷遺跡	寿町２丁目 321－11	森山　光熙	117m²	個人住宅	浄化槽部分1.5×２mを人力掘削 遺構・遺物なし
11	5.11.29～12.2	中野遺跡	中野町２丁目 495他	富田林市長 内田　次郎	11m²	下水道工事	本書掲載
12	5.12.6～12.8	錦聖遺跡	錦織1619の一部	安原　治	314m²	個人住宅	本書掲載
13	5.12.10	喜志遺跡	喜志町 ４－３－１	米澤　正美	244m²	個人住宅	トレンチを設定し３×１mを人力掘削、田の畦畔を検出
14	5.12.24～12.27	甲田遺跡	甲田446－４	喜田　米幸	710m²	個人住宅	本書掲載
15	6.1.20～1.21	甲田南遺跡	甲田18－１	田守　正道	492m²	店舗	浄化槽部分2.8×２mを人力掘削 ピット１・土壙１を検出する
16	6.2.22～2.23	別井遺跡	別井元南 66－２	辻田　茂	319m²	個人住宅	浄化槽部分1.5×２mを人力掘削 溝の一部を検出　縄文時代の石鏃や、土師器を検出する
17	6.2.23	甲田南遺跡	甲田59－２	藤井　正人	291m²	個人住宅	浄化槽部分１×２mを人力掘削 遺構・遺物なし

表１　発掘調査一覧表

Ⅱ．錦織南遺跡

錦織南遺跡は、市内の南部にあって、市域のほぼ中心を北流する石川の左岸、近鉄長野線滝谷不動駅の南西に広がっている。その範囲は、南北630m、東西470mにおよぶ。本遺跡は、1971～1976年にかけて富田林市教育委員会が実施した分布調査によって確認されたもので、その後、富田林市教育委員会や大阪府教育委員会の発掘調査で遺跡の内容がしだいに明らかになり、縄文時代晩期から中世に至る複合遺跡であることが判明してきている。

ＮＫＳ９３－２
調 査 地：富田林市錦織８９９－１
調査面積：2.28㎡／183.95㎡

調査地は、遺跡の北半部にあって、中央を走る旧東高野街道の東に広がる旧集落の一角にある。調査地の西方には、市立錦郡小学校がある。

個人住宅建設に伴うもので、浄化槽部分を調査対象とし、1.2m×1.9mの範囲を人力掘削により発掘調査を実施した。

現地調査は、平成５年12月６日から12月８日まで行った。

１．層序

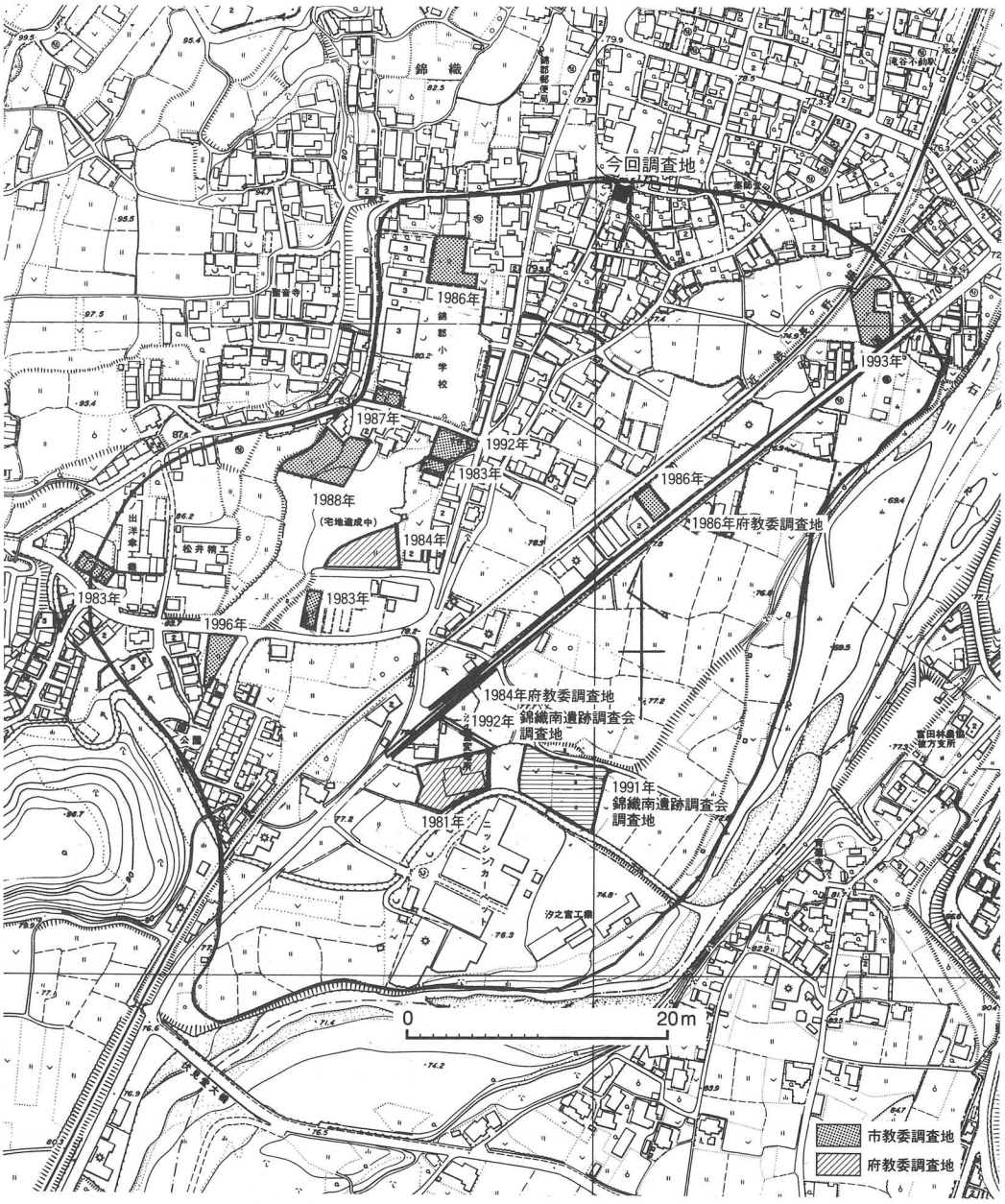
基本的な層序は５層ある。上から順に第１層・耕土（20cm）、第２層・床土（６cm）、第３層・灰黄色土（５cm）、第４層・褐灰色粘質土（19cm）、第５層・濁褐灰色粘質土（18cm）が堆積する。西壁断面には、第５層に灰が混じる部分がある。

２．遺構

ピット３、土壙２を検出した。

ピット１

調査区中央のやや北よりに位置する。直径約35cmのほぼ円形をしており、深さは10cmを測る。埋土は濁褐灰色粘質土に黄灰色粘質土が混じる。遺物は出土しなかった。



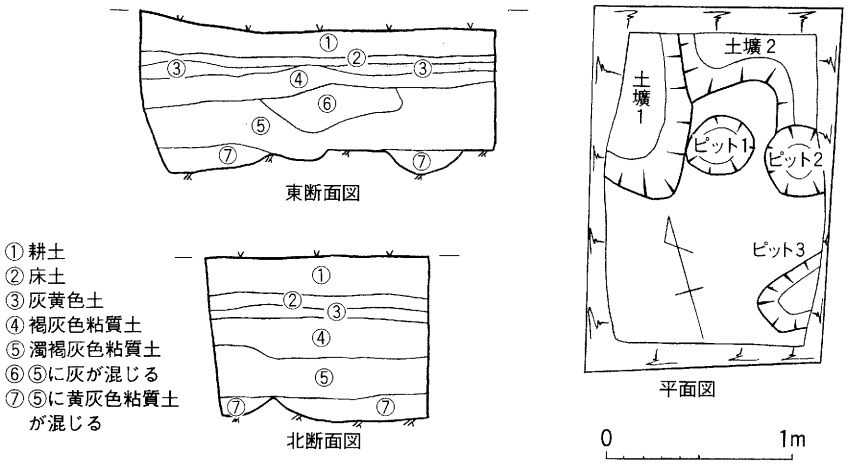
挿図１　錦織南遺跡発掘調査地位置図

ピット２

ピット１の東にあって、一部が東壁内にある。形状はほぼ円形をしており、南北径は38cm、深さは、13cmを測る。土壙２を切っている。埋土は濁褐灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

ピット３

調査区の南東隅に位置する。一部が東壁内にあるため、正確な規模等は不明である。検出し



挿図２　遺構平面・断面図

た部分での深さは、13cmを測る。埋土は濁褐灰色粘質土に黄灰色粘質土が混じる。遺物は出土しなかった。

土壙１

調査区の北西隅に位置する。一部が調査区外にあるため、正確な規模等は不明である。北壁断面での深さは、10cmを測る。埋土は濁褐灰色粘質土に黄灰色粘質土が混じる。遺物は出土しなかった。

土壙２

調査区の北東隅に位置する。土壙１に接しており、一部はピット２に切られている。一部が調査区外にあるため、正確な規模等は不明である。北壁断面での深さは、12cmを測る。埋土は土壙１と同じである。遺物は出土しなかった。

３．まとめ

調査地は、錦織南遺跡の北半部に位置し、錦織集落の密集地内ある。この付近での調査例は少ない。調査地西方を南北に走る東高野街道の西側に位置する錦郡小学校内の本格的な発掘調査では、奈良時代から中世に至る集落遺構が確認されている。

第１・３層からは、近世遺物が出土しており、水田に伴うものである。また、第４層からは、中世の土師質土器が出土している。第５層や各遺構からは、遺物が出土していないため、時期的なものを推測することが困難である。いづれにしても、集落遺構が確実に現在の集落の範囲にまで及んでいることが判明した。　　（中辻）

Ⅲ．甲田南遺跡

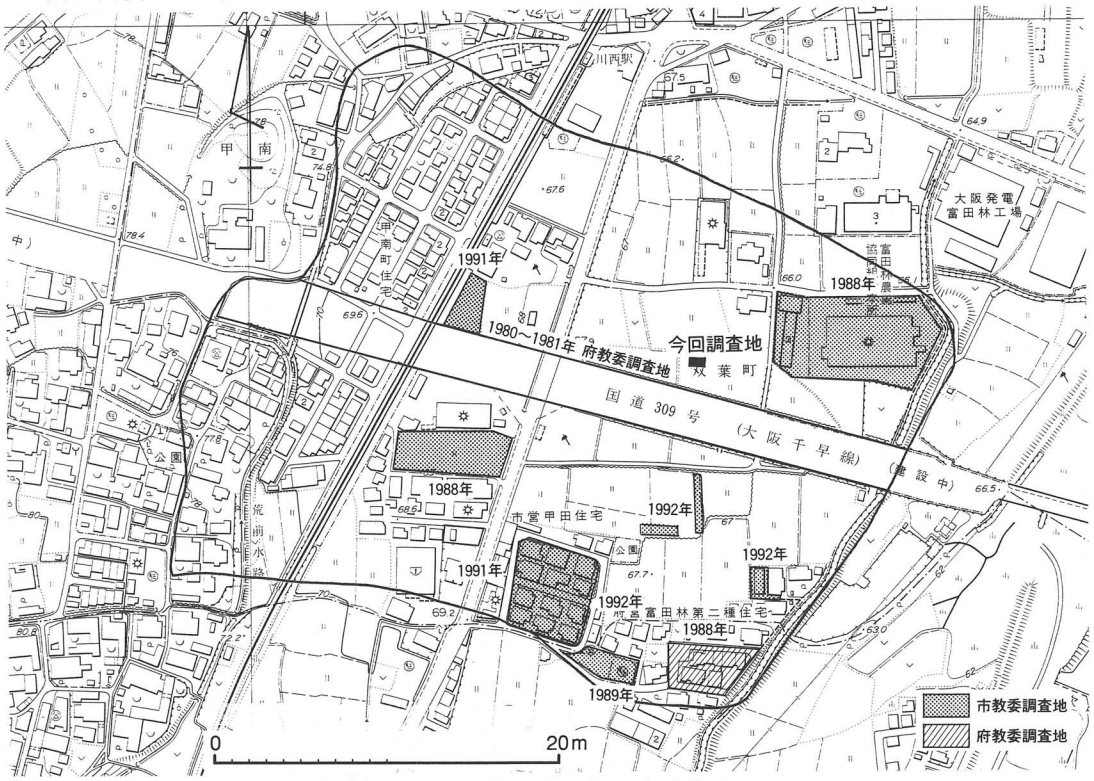
甲田南遺跡は、石川西岸の標高６６ｍ～７０ｍの下位段丘上に位置し、遺跡の推定範囲は東西３５０ｍ、南北６００ｍで、ほぼ中央に国道３０９号線が走っている。１９８０年～１９８４年にかけて大阪府教育委員会が行った国道３０９号線建設工事に先立つ調査で、縄文時代から鎌倉時代にかけての遺構が検出された。とりわけこの時の調査では、弥生時代の竪穴住居が多数検出され、弥生時代の集落址として注目された。１９８８年に本市が行ったマンション建設に伴う調査でも弥生時代の竪穴住居と方形周溝墓が検出され、弥生時代の集落の構造が次第に明らかになってきている。今回の調査は前述の調査区に西接する地区で、小範囲にもかかわらず、竪穴住居が検出された。

甲田南遺跡

ＫＤＳ９３－１

調 査 地：富田林市甲田７６－１

調査面積：56㎡／903.74㎡



挿図３　甲田南遺跡発掘調査地位置図

調査地は、旧１７０号線と国道３０９号線の交差点の東側に位置する。共同住宅の建設に伴い平成５年４月２８日に、埋蔵文化財発掘届出書が富田林市教育委員会社会教育課に提出された。協議の結果、建物部分については遺構面を保存することになった。その結果、平成５年９月２７日から１０月２６日まで浄化槽部分についてのみ発掘調査を実施することになった。

１.層　序

基本的な層序は、盛土（２０cm）を除いて、上から順に第１層・耕土（１０cm)、第２層・床土（４cm)、第３層・灰黄色土（８cm)、第４層・黄灰色土（６cm)、第５層・濁灰褐色土（８cm)、第６層・黒褐色混礫弱粘質土（８cm)、第７層・暗茶褐色混礫土（１０cm）が堆積する。ただし石川の低位段丘面に立地するため、西から東へゆるやかに傾斜しているので第６層が東へいくほど厚くなっている。遺構面は３面あり、第１面は第５層を掘りこんでおり、第２面は第７層を掘りこんでおり、第３面は地山を掘りこんでいる。

２.遺　構

遺構面は３面ある。第１面では土壙１、第２面では竪穴住居址２、ピット３、土壙２、溝２、第３面では多数のピット、土壙、溝、落ち込みを検出した。

＜第１面＞

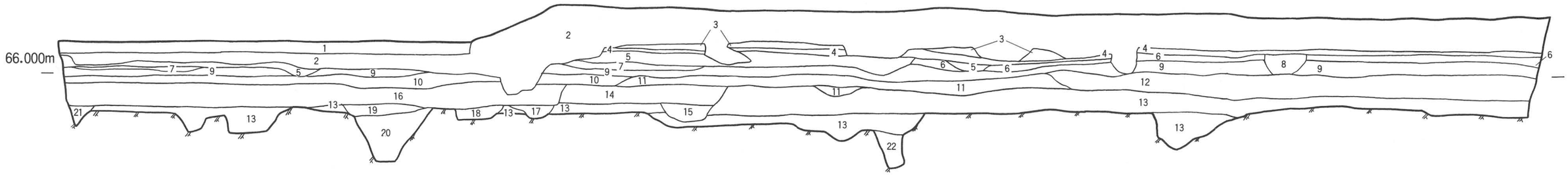
土壙１

調査区の南東隅で検出した。遺構の大半が調査区外にあるため、正確な規模は不明である。深さは、約３５cmを測る。埋土は灰色砂質土である。

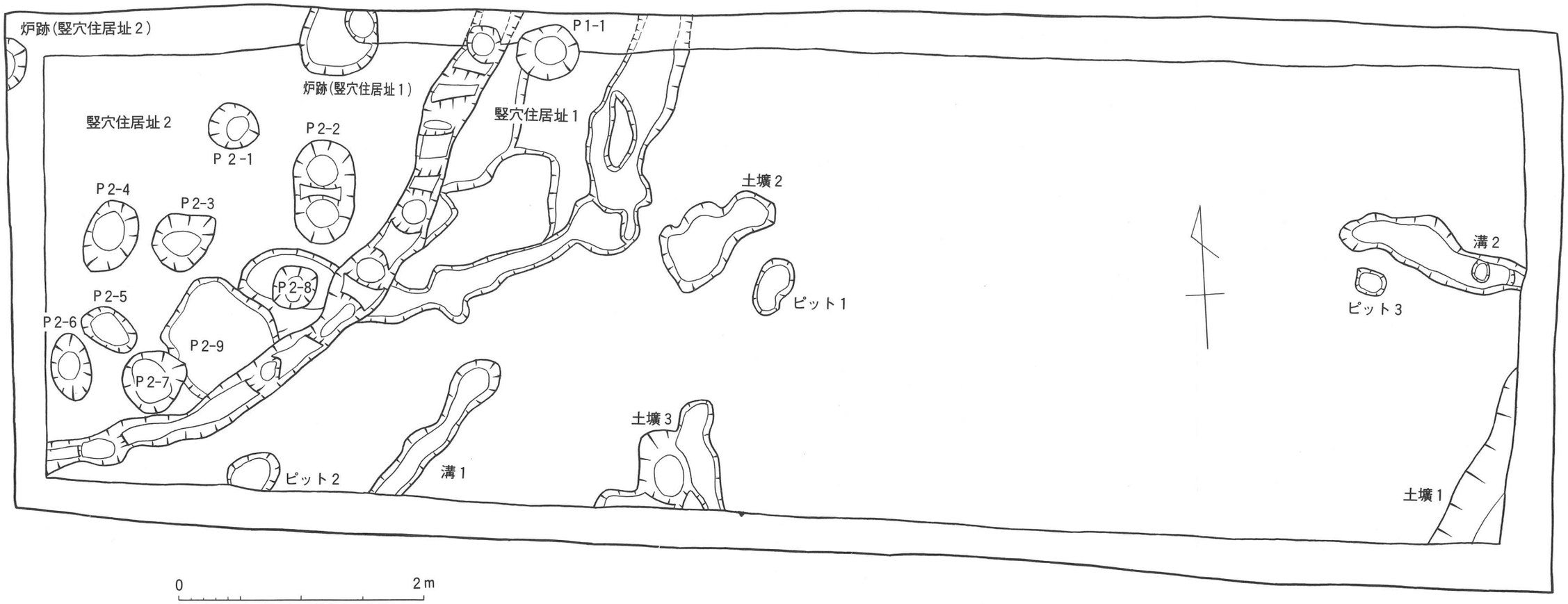
＜第２面＞

竪穴住居址１

竪穴住居址２棟が重複して調査区の北西の隅にあり、竪穴住居址１は竪穴住居址２によって西半部の大半が切られている。調査区内では全体の約２分の１、つまり南半部を検出したことになる。竪穴住居址２内の北壁付近にあるピットを炉跡と考え、住居址の中心に位置すると仮定した場合、直径５メートル前後の円形の竪穴住居になると思われる。埋土は、灰褐色混礫粘質土である。炉跡は、径約５０cm、深さ約１０cmを測り、形状は隅丸方形になると思われる。埋土は暗褐色混礫土で、炭片を含む。住居址内の遺構では、ほぼ円形の直径約５０cm、深さ約３０cmのピット（Ｐ１－１）がある。埋土は、暗褐色混礫弱粘質土である。このピットを柱穴とすると、炉跡の南西、竪穴住居址２内にあるピット（Ｐ２－１）が柱穴とも考えられる。



1．擁壁　2．盛土　3．耕土　4．床土　5．灰黄色土
6．褐色土に黄色土が混じる　7．黄灰色土　8．暗渠
9．濁灰褐色土　10．黒褐色混礫弱粘質土　11．濁灰色混礫粘質土
12．褐灰色混礫弱粘質土　13．暗茶褐色混礫土
14．灰褐色混礫粘質土（竪穴住居址１）
15．濁灰褐色混礫粘質土（竪穴住居址1．周溝）
17．暗褐灰色混礫粘質土（竪穴住居址2．周溝）
19．暗褐色混礫粘質土（竪穴住居址1．炉跡）
21．濁褐灰黄色混礫粘質土
16．暗褐色混礫粘質土（竪穴住居址２）
18．暗褐色混礫粘質土
20．暗茶褐色混礫土
22．暗茶灰褐色混礫土（土壙６－２）



挿図４　遺構平面（第１面、第２面）・断面図

ほぼ円形で、直径約３５cm、深さ約５０cmを測る。埋土は暗褐色混礫粘質土である。住居址の周囲には、幅約２０～４０cm、深さ約１５cmの断面U字形の周溝がある。埋土は、濁灰褐色混礫粘質土である。

竪穴住居址２

調査区内では全体の約４分の１、住居址の南東部を検出した。住居址内の遺構には、ピットが１０確認された。そのうち、ピット（Ｐ２－１）については、住居址１の柱穴と想定した。住居址２の柱穴を考えた場合、楕円形の長径約８０cm、短径約４５cm、深さ約５０cmのピット（Ｐ２－２）が可能性として高い。このピットの特徴は、同規模の穴が１つの穴内に２つあることである。この住居址の規模を、周溝の円弧から復元すると約９m前後となり、大型のものになる。埋土は暗褐色礫粘質土である。その他のピットは、位置からみて柱穴等とは考えにくく、遺構の性格は不明である。ただし、土質が第３面に似ているため、第３面の遺構とも思われる。住居址の周囲には、幅４０cm前後、深さ約１０cmの断面U字形の周溝がある。埋土は、暗褐灰色礫粘質土である。また周溝の中に支柱と思われる柱穴が約１.５m間隔で４つあり、形はほぼ円形で直径約３０cm、深さ約４０cmを測る。埋土は暗褐色混礫弱粘質土である。

ピット１

調査区のほぼ中央で検出した。土壙２の東に位置する。形状はほぼ円形で、径約４０cm、深さ約１０cmを測る。埋土は暗褐色混礫弱粘質土である。

ピット２

調査区の南壁付近で検出した。溝１の西に位置する。遺構の一部が側溝によって切られているため、正確な規模は不明である。深さは約20cmを測る。埋土は暗褐色混礫弱粘質土である。

ピット３

調査区の中央東端で検出した。溝２の南に位置する。ほぼ円形で、直径約20cm、深さ10cmを測る。埋土は暗茶褐色混礫弱粘質土である。

溝１

調査区の南西で検出した。幅は２０cm前後、深さ約６cmを測る。長さ約１.３m分を検出した。埋土は暗茶褐色混礫弱粘質土である。

溝２

調査区の東端で検出した。幅は３０cm前後、深さ約１５cmを測る。長さ約１．５m分を検出した。埋土は暗茶褐色混礫弱粘質土である。

土壙２

調査区のほぼ中央で検出した。平面形は不整形で、長軸の長さは約７０cm、深さ約２０cmを測る。埋土は暗褐色混礫弱粘質土である。

土壙３

調査区のほぼ中央南端で検出した。土壙２の南に位置する。遺構の一部が側溝によって切られているため、正確な規模は不明である。深さは、最も深いところで約３０cmを測る。遺構の東と南側に約２０cmの深さでテラスがある。埋土は暗褐色混礫弱粘質土である。

＜第３面＞

溝３

調査区の北東隅で検出した。落ち込み１の北に位置する。大半が調査区外になるため規模については不明である。深さは、最も深いところで、１６cmを測る。埋土は暗茶褐色混礫土である。

土壙４～１１

土壙８を検出し、大半が不整形な形状をしている。規模については、遺構一覧表を参照されたい。

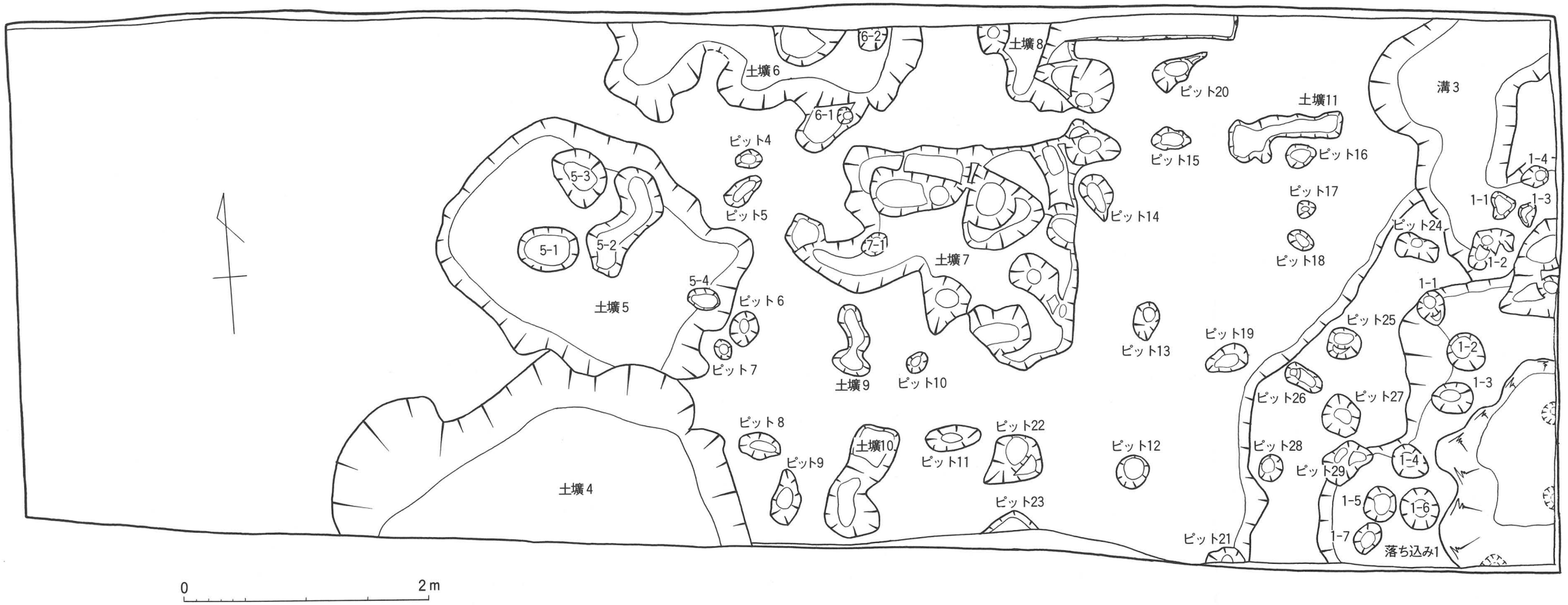
落ち込み１

調査区の南東の隅にあり、不整形な形状をしている。遺構のなかにピット８が確認され、円形、楕円形、不整形の形状をしており、深さ約１０～３０cmを測る。埋土は暗茶褐色混礫土である。

ピット

ピット４～２９については、遺構一覧表を参照されたい。

（今西）



挿図５　遺構平面図（第３面）

種　別	形　状	規　　模（m）	深さ(m)	土　　色　・　土　　質
土壙4	不 整 形	(3.35) × (1.62)	0.51	暗茶灰褐色混礫土
土壙5	不 整 形	2.56 × (2.02)	0.22	暗茶褐色混礫土
5－1	楕 円 形	0.48 × 0.35	0.08	暗茶褐色混礫土
5－2	不 整 形	0.91 × 0.35	0.07	暗茶褐色混礫土
5－3	隅丸方形	0.47 × 0.47	0.13	暗茶褐色混礫土
5－4	楕 円 形	0.25 × 0.17	0.08	暗茶褐色混礫土
土壙6	不 整 形	(2.53) × (1.01)	0.23	暗茶褐色混礫土
6－1	円　　形	0.13 × 0.14	0.10	暗茶褐色混礫土
6－2	不 整 形	0.22 × 0.19	0.34	暗茶灰褐色混礫土
6－3	不 整 形	(0.59) × (0.32)	0.19	暗茶褐色混礫土
土壙7	不 整 形	2.32 × 2.12	0.18	暗茶褐色混礫土
7－1	楕 円 形	0.16 × 0.21	0.16	暗茶褐色混礫土
7－2	隅丸三角	0.76 × 0.38	0.17	暗茶褐色混礫土
7－3	隅丸三角	0.69 × 0.69	0.16	暗茶褐色混礫土
7－4	不 整 形	0.44 × 0.34	0.25	暗茶褐色混礫土
7－6	不 整 形	0.27 × 0.23	0.13	暗茶褐色混礫土
7－7	不 整 形	0.72 × 0.38	0.27	暗茶褐色混礫土
7－8	不 整 形	0.43 × 0.47	0.18	暗茶褐色混礫土
7－9	不 整 形	0.48 × 0.37	0.14	暗茶褐色混礫土
土壙8	不 整 形	(1.22) × (0.81)	0.48	暗茶褐色混礫土
8－1	不 整 形	(0.25) × (0.24)	0.05	暗茶褐色混礫土
8－2	不 整 形	0.64 × 0.47	0.46	暗茶褐色混礫土
土壙9	不 整 形	0.56 × 0.31	0.03	暗茶褐色混礫土
土壙10	不 整 形	0.92 × 0.46	0.25	暗茶褐色混礫土
土壙11	不 整 形	0.89 × 0.32	0.12	暗茶褐色混礫土
ピット4	不 整 形	0.22 × 0.15	0.06	暗茶褐色混礫土
5	不 整 形	0.33 × 0.19	0.06	暗茶褐色混礫土
6	楕 円 形	0.24 × 0.28	0.11	暗茶褐色混礫土
7	円　　形	0.14 × 0.16	0.04	暗茶褐色混礫土
8	不 整 形	0.34 × 0.22	0.10	暗茶褐色混礫土
9	不 整 形	0.22 × 0.44	0.17	暗茶褐色混礫土
10	円　　形	0.16 × 0.17	0.10	暗茶褐色混礫土
11	楕 円 形	0.44 × 0.25	0.15	暗茶褐色混礫土
12	円　　形	0.25 × 0.27	0.15	暗茶褐色混礫土
13	隅丸方形	0.21 × 0.31	0.12	暗茶褐色混礫土
14	不 整 形	0.38 × 0.40	0.14	暗茶褐色混礫土
15	不 整 形	0.32 × 0.19	0.16	暗茶褐色混礫土
16	隅丸方形	0.25 × 0.20	0.05	暗茶褐色混礫土
17	隅丸三角	0.14 × 0.15	0.05	暗茶褐色混礫土
18	隅丸方形	0.22 × 0.15	0.06	暗茶褐色混礫土
19	隅丸三角	0.36 × 0.22	0.11	暗茶褐色混礫土
20	不 整 形	0.49 × 0.21	0.21	暗茶褐色混礫土
21	不 整 形	(0.32) × (0.13)	0.14	暗茶灰褐色混礫土
22	隅丸方形	0.55 × 0.44	0.15	暗茶褐色混礫土
23	不 整 形	(0.55) × (0.19)	0.08	暗茶灰褐色混礫土
24	隅丸方形	0.34 × 0.18	0.20	暗茶褐色混礫土
25	円　　形	0.26 × 0.25	0.24	暗茶褐色混礫土
26	不 整 形	0.34 × 0.18	0.09	暗茶褐色混礫土
27	隅丸方形	0.38 × 0.31	0.18	暗茶褐色混礫土
28	円　　形	0.19 × 0.21	0.25	暗茶褐色混礫土
29	不 整 形	0.37 × 0.28	0.24	暗茶褐色混礫土

表２　遺構一覧表

3．遺　　物

今回の調査で出土した遺物の大半は弥生時代のもので、土器の他に紡錘車とサヌカイト製の石器類、砂岩片、鉄斧がある。これら弥生時代の遺物の他に土壙１から土師器が、包含層、および側溝から土師器、須恵器、瓦器、磁器、瓦、砂岩片、焼土塊が出土している。以下、遺構毎に遺物を概観した後、図化した遺物については土器類、紡錘車、石器類の順に観察表にして記述する。

なお、板状鉄斧については別に項をもうけている。

竪穴住居址１出土遺物

炉跡、周溝、ピット１から弥生土器が、埋土内に弥生土器とサヌカイトの剥片が出土している。

弥生土器はいずれも細片で、器種は分からない。周溝から出土した土器片１点には、簾状紋と円形浮紋が施されている。なお、生駒西麓産のものは認められない。

サヌカイトの剥片は２点出土しているが、ともに縦形剥片で、１点は原面打面、他は剥離面打面をもつ。

竪穴住居址２出土遺物（挿図６・図版１１）

ピット１、ピット２、ピット４から弥生土器が、周溝、ピット３から弥生土器とサヌカイト製の石器類、埋土内からは弥生土器、紡錘車、サヌカイト製の石器類、鉄斧が出土している。

ピット１の土器は細片で器種が分からない。生駒西麓産のものが１点ある。

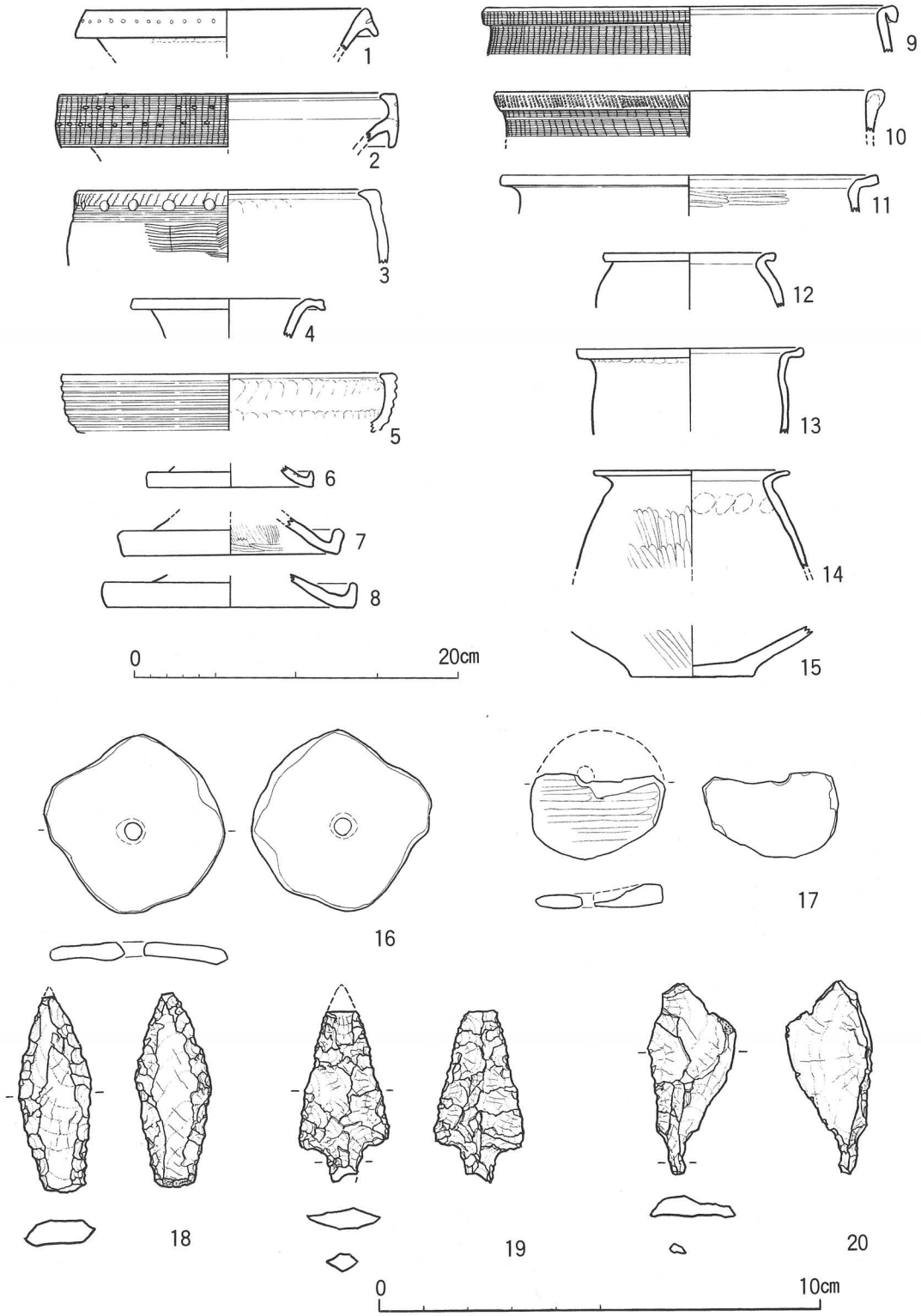
ピット２の土器も細片で器種は分からないが、底部片が１点、波状紋と直線紋の施された破片が１点出土している。出土量は少ないが、約２０％が生駒西麓産のものである。

ピット４の土器も細片で器種は分からない。生駒西麓産のものはない。

周溝の土器には、器種の分かるものとしては大型の鉢、高杯、甕、甕用蓋がある。大型の鉢は在地のもので口縁部は段状を呈し、外面には幅約２cmの簾状紋を２条、ヘラ工具による斜格子紋、簾状紋と同じ工具による直線紋が施されている。その他、流水紋の施された破片も１点出土している。約２０％が生駒西麓産のものである。

サヌカイト製の石器は細部調整剥片が１点と剥片が５点出土している。剥片の内訳は石刃状剥片１点、横形剥片１点、縦形剥片３点である。縦形剥片の中の１点は基部欠損のため打面の種類が分からないものがあるが、他はすべて線状打面である。

ピット３の土器は細片で器種は分からない。出土量は少ないが、約２５％が生駒西麓産のも



挿図6　竪穴住居址2出土遺物

のである。

サヌカイト製の石器は石鏃(１８)１点、石核１点、細部調整剥片１点、剥片７点が出土している。石鏃は縦形剥片を素材にしている。両面中央に素材面を残している。石核は対向打面をもち、49.6mm×38.3mm×29.2mmを測る。細部調整剥片は石刃状剥片に薄形・深形・連続・凹形・表面(一部裏)の細部調整を施したものである。打面は欠失しているため分からない。剥片の内訳は横形剥片３点、石刃状剥片２点、縦形剥片１点、不明１点である。横形剥片の内、１点は原面打面、石刃状剥片はともに剥離面打面をもつが、他は打面が欠失している。

埋土出土土器(１)～(１５)には広口壷、無頸壷、鉢、高杯、甕がある。約２２％が生駒西麓産のものである。

広口壷には口縁部が下外方に拡張するもの(広口壷A)と上下に大きく拡張するもの(広口壷B)、ほぼ水平に開いた後、端部でわずかに下方へ肥厚するもの(広口壷C)がある。広口壷Aの外面には刺突紋の施したもの(１)、円形浮紋を貼りつけたもの、簾状紋を施したものがある。広口壷Bの外面には簾状紋と刺突紋の施したもの(２)がある。広口壷C(４)は無紋で小型の壷である。

無頸壷は１点出土している。段状の口縁部をもつもので、口縁部外面には擬凹線紋が施してあったかも知れないが磨滅のためはっきりしない。体部外面は無紋で、口縁部直下に円孔が穿れている。　鉢は口縁部が内傾して、端部で内側に肥厚する深椀状を呈するもの(鉢A)、端部が外湾して巻き込み、一見段状口縁に見えるもの(鉢B)、段状の口縁部を呈するもの(鉢C)がある。鉢Aは外面に列点紋、円形浮紋、凹線紋、簾状紋を施しているもの(３)、簾状紋だけを施しているものがある。鉢Bは外面に簾状紋を施しているもの(９)があるが体部の簾状紋は幅の広い工具で施している。鉢Cは外面に列点紋と簾状紋を施しているもの(１０)と口縁部は無紋で体部に簾状紋を施しているものがある。

高杯には浅鉢状のもの(高杯A)と口縁部が水平にのびた後、垂下するもの(高杯B)がある。高杯Aには外面に簾状紋を施したもの、凹線紋を施したもの(５)、無紋のものがある。
脚柱部残存のものは内空である。裾部残存のものはすべて端部が上方に拡張する。

甕には口縁端部の拡張しないもの(甕A)、上方にわずかに拡張するもの(甕B)、上下に拡張するもの(甕C)がある。体部は大きく張り出すものとほとんど張らないものがある。甕Bの中に１点、口縁部が受け口状に近いものがあり、外面には沈線が１条めぐる。甕Cは大型の甕であるが、外面はすべて無紋である。

これらのほかに、鉢用の把手が１点出土している。

紋様構成としては壷には幅広の簾状紋が多用される。原体の最大幅は3.3cm 以上あるものも認められる。この他、直線紋、波状紋、刺突紋、円形浮紋が施紋されている。鉢にも壷と同様の紋様が施されているが、簾状紋の原体は壷ほど幅広ではない。また、列点紋、凹線紋も施紋

されている。 調整方法は全体に残りが悪いので大半が不明であるが、外面にはヘラミガキ、刷毛目の他、ヘラケズリが認められる。内面にはヘラミガキと刷毛目が認められる。

紡錘車(１６)(１７)は２点ある。ともに在地の胎土をもつ。

サヌカイト製の石器は石鏃(１９)と石錐(２０)がある。石鏃は有茎式で、先端は欠失している。石錐は横形剥片を素材にして、右縁部を刃部にしている。これらの石器の他に剥片が８点出土している。

剥片の内訳は横形剥片３点、縦形剥片５点である。横形剥片は、原面打面のもの１点、剥離面打面のもの１点で後１点は先端部片で打面の状況はわからない。縦形剥片は、原面打面のもの３点、剥離面打面のもの２点である。

鉄斧は１点出土している。詳細は後項を参照されたい。

溝１出土遺物

弥生土器が２点出土しているが、細片のため器種は分からない。ともに在地の胎土をもつ。

土壙１出土遺物

弥生土器、土師器、瓦が出土している。

弥生土器には甕Ａがある。生駒西麓産の出土比率は５％である。

土師器は椀が１点出土している。平安時代のものである。

ピット１

弥生土器が出土している。細片のため器種は分からない。生駒西麓産のものはない。

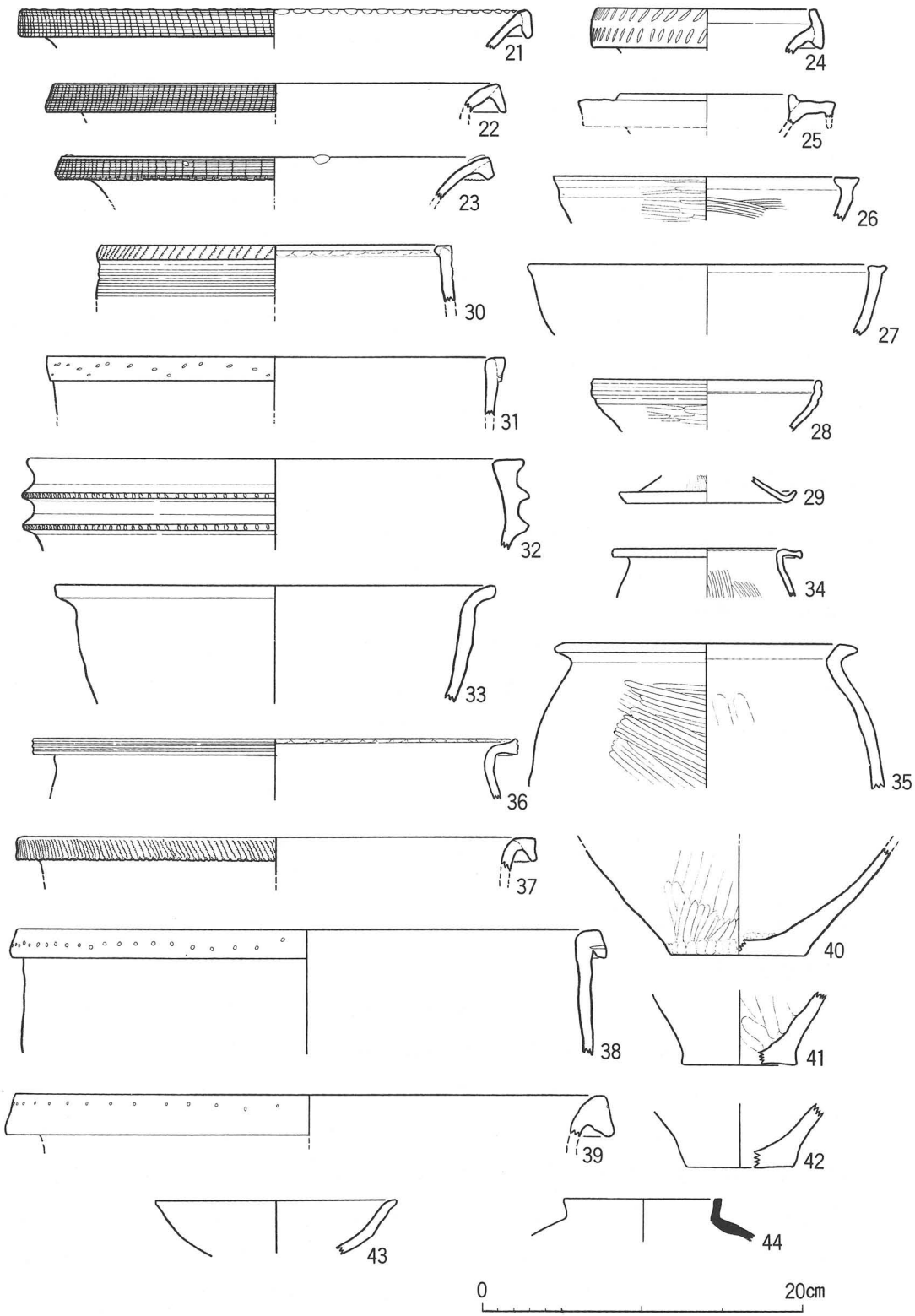
包含層出土遺物(挿図７，８・図版１１)

第６層出土遺物

弥生土器、紡錘車、サヌカイト製の石器、砂岩片が出土している。

弥生土器には広口壷、鉢、高杯、甕の他に水差しの把手がある。

広口壷はＡ・Ｂの他、上下にわずかに拡張して面をもつもの(広口壷Ｄ)、口縁部がほとんど拡張しないもの(広口壷Ｅ)がある。Ａ(２２)が１１点、Ｂが５点、Ｄが２点、Ｅが２点ある。Ａは口縁部外面に簾状紋を施すものと無紋のものがある。前者の中には口縁部内面に円形浮紋で飾っているものもある。Ｂには口縁部が上下にほぼ同じくらい拡張するもの、上方に大きく、下方に小さく拡張するもの、上方のみ拡張するものがある。その中でも上方に大きく、下方に小さく拡張するものが多く出土している。紋様は簾状紋、刺突紋、扇形紋が施されている。上方にのみ大きく拡張するものは１点だけで、外面に凹線紋を施している。Ｄには口縁部外面に



挿図７　包含層・側溝出土土器

波状紋、内面に列点紋を施しているものと無紋のものがある。Eはすべて無紋である。

鉢はA、Cがある。Aは2点、Cは9点ある。A(31)は外面に列点紋と凹線紋を施すものがある。Cは口縁部外面に列点紋、体部外面に波状紋と凹線紋を施すもの、口縁部は無紋で体部外面に凹線紋を施すもの、口縁部外面は斜線紋で、体部外面に簾状紋を施すものがある。鉢には台部の付くものがあるらしく、ストレートに開く台部が2点出土しいている。1点は円孔と凹線紋を施したもので、他は凹線紋だけを施したものである。

高杯はAとCがある。A(26)(27)は4点あり、凹線紋を施すもの、列点紋を施すもの、無紋のものがある。Cは1点ある。杯部と脚部の接合は円盤充填による。裾部は端部が斜め上方に拡張するもの(27)がある。

甕は22点出土しているが、Aが最も多い。

水差しの把手は2点出土しているが、ともに約2.5cm幅を測る偏平な把手で、1点は刺突紋がアトランダムに施してあり、他は無紋である。

紡錘車は3点出土している。生駒西麓産のものはない。

サヌカイト製の石器は石錐(50)が1点、剥片が3点出土している。原面打面の横形剥片を素材にした石錐で、素材の先端縁に刃部を作り出している。剥片は2点が横形剥片、1点は縦形剥片である。打面の状況は横形剥片の1点が原面打面、あと1点が剥離面打面である。縦形剥片は打面が欠失しているため分からない。

砂岩片は焼けている。

第5層出土遺物

弥生土器、土師器、須恵器、磁器、サヌカイト製の石器、砂岩片、焼土塊がある。

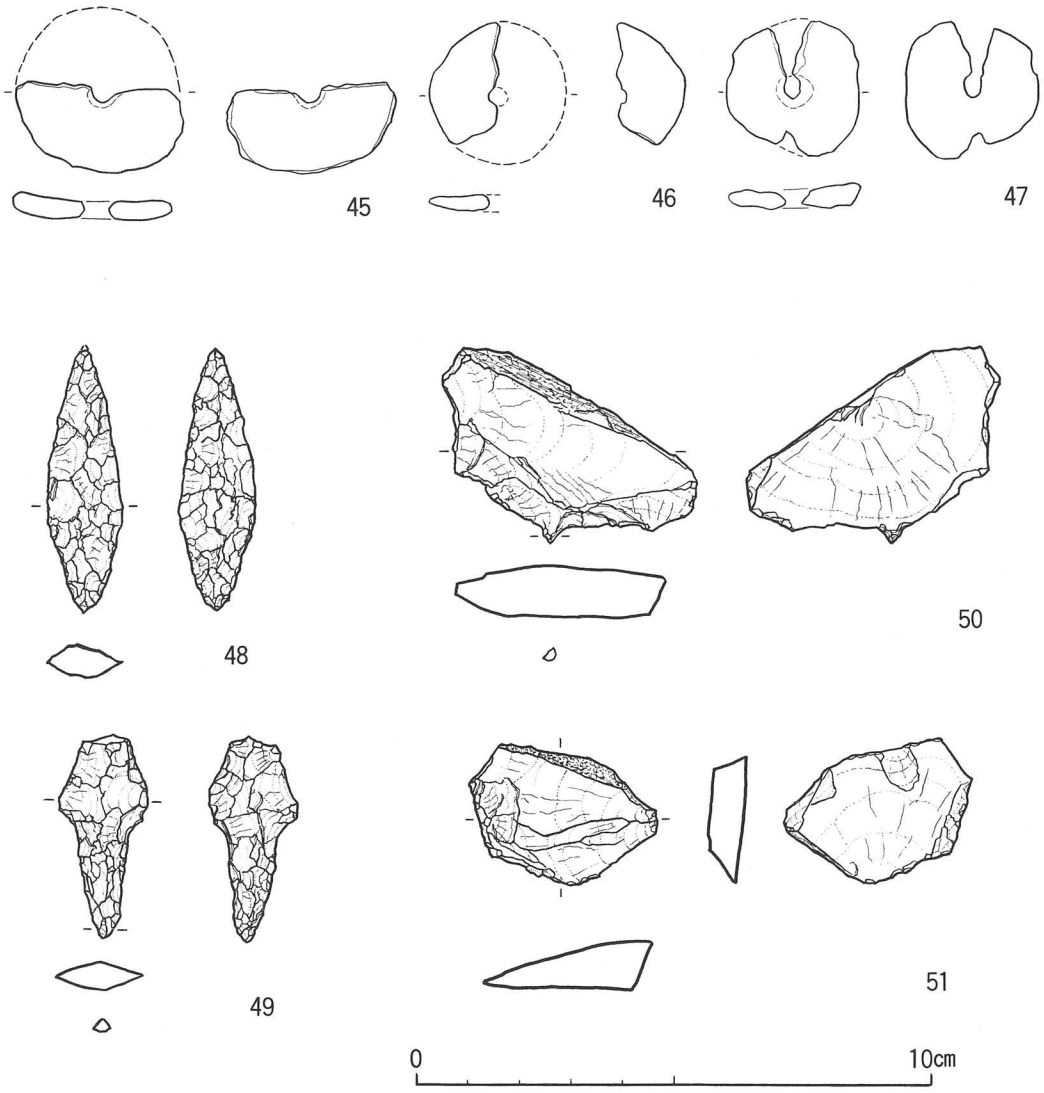
弥生土器には広口壷、鉢、高杯、甕がある。

広口壷A、B、Dが1点づつ出土している。Aの口縁部外面は簾状紋を施している。B(24)は口縁部外面に斜線紋を施している。Dは無紋である。

鉢はAとCが1づつ点出土している。ともに無紋である。台部が2点出土しているが、1点は円孔が多数あいている。あと1点は生駒西麓産の胎土をもつ。

高杯は口縁部が水平に伸びた後、垂下しない(高杯C)が1点出土している。裾部は端部が斜め上方に拡張する。

甕(37)は1点出土している。口縁部が下方にのみ拡張するもの(甕D)で口縁部外面に列点紋と下端に刻み目を施している。



挿図８　包含層・側溝出土紡錘車・石器

土師器は２点出土している。杯(３８)と小皿である。

須恵器は２点出土している。短頸壷(３９)と甕の体部片である。

磁器は白磁が１点出土している。器種は分からない。。

サヌカイト製の石器は石鏃(４８)が１点出土している。凸基無茎式の石鏃である。

側溝出土遺物(挿図７，８・図版１１)

弥生土器、須恵器、瓦器、瓦、サヌカイト製の石器、砂岩片が出土している。

弥生土器には広口壷、太頸壷、鉢、高杯、甕がある。

広口壷はAが4点出土している。口縁部外面に簾状紋を施すもの、口縁部外面に簾状紋と内面に円形浮紋を施すもの(２１)、さらに下端に刻み目を付加するもの(２３)、口縁部外面に波状紋、下端に刻み目を施すものがある。

太頸壷は1点出土している。生駒西麓産のもので口縁部外面は列点紋の上に円形浮紋が付加されている。

鉢はA、C、甕Aを浅くしたもの(鉢D)、立ち上がる口縁部をもつ浅鉢状のもの(鉢E)の他、鉢に付くと思われる把手が出土している。A(３２)は1点で貼り付け凸帯の上に刻み目が施されている。Cは2点出土している。口縁部外面に刺突紋を施したもの(31)と口縁部外面に列点紋、体部外面に簾状紋を施したものがある。D(33)は無紋で1点出土している。E(28)は1点出土していて、口縁部外面に凹線紋を施している。

高杯はB(２５)が2点出土している。脚部は内空で絞り目が顕著に残る。杯部と脚部の接合は円盤充填法による。裾部は端部が斜め上方に拡張する。生駒西麓産の胎土をもつものは外面に竹管紋が施されている。

甕は5点出土している。大型の甕は口縁部外面に凹線紋の施されるもの(３６)と刺突紋の施されるもの(３８)(３９)がある。

須恵器は甕の体部片と蓋杯の体部片が出土している。

瓦器は椀が1点出土している。終末期の瓦器椀で高台がほとんどつぶれている。

サヌカイト製の石器は石錐(４９)とピエス・エスキエ(５１)が1点づつある。石錐は有茎式石鏃の茎部を長くしたような形態をもち、刃部を茎部先端にもつ。ピエス・エスキエは横形剥片の両縁に一対の平形・薄形・両面細部調整を施している。

(粟田)

4.まとめ

今回の調査地は調査面積がそれほど大きくなかったが、多くの弥生時代の遺物や2棟の重複した竪穴住居等を確認できた。過去の調査から、この地点は弥生時代集落の中心に近いところとされている。さらに竪穴住居2の埋土中から板状鉄斧が出土した。これと同様の遺物は、調査地の南を隣接して走る国道３０９号線の大阪府教育委員会が実施した発掘調査でも出土しており、形態もほぼ同じである。今回の調査で板状鉄斧が出土した竪穴住居址は直径9m前後の大形と思われ、この住居が集落内で重要な役割を果たしていたと思われる。このような貴重な遺物が小範囲で2点も出土したことは、集落の先進性を示すものであろう。また3面は遺物を伴わず時期については不明であり、今後の調査に期待をしたい。

(今西)

番号	器種	遺構・層位	法量（cm）				技法	紋様	色調	胎土	備考
			口径	器高	底径	裾部径					
1	広口壷A	竪穴住居址2	17.2	2.5	−	−	−	口縁部：刺突紋	淡橙色	やや粗	
2	広口壷B	竪穴住居址2	20.7	3.3	−	−	−	口縁部：簾状紋（原体3㎝）の後、刺突紋	暗茶褐色	良・角閃石	生駒西麓産
3	鉢　A	竪穴住居址2	18.4	4.6	−	−	内面：指頭圧痕	口縁部：列点紋（右→左）・凹線紋の後、円形浮紋 体部：直線紋	橙色	良	
4	広口壷C	竪穴住居址2	11.7	2.5	−	−	−	−	黄茶色	良	
5	高杯A	竪穴住居址2	20.5	3.7	−	−	外面:よこなで 内面:指頭圧痕	外面：凹線紋	橙色	精良	
6	高　杯	竪穴住居址2	−	1.3	−	10.2	−	外面：竹管紋	暗茶褐色	精良	生駒西麓産
7	高　杯	竪穴住居址2	−	2.3	−	13.2	裾部内外：よこなで	−	明褐色	精良	
8	高　杯	竪穴住居址2	−	2.0	−	15.3	−	−	赤褐色	やや粗	
9	鉢　B	竪穴住居址2	25.2	3.0	−	−	内面：よこなで	外面：簾状紋（左→右）	橙色	良	
10	鉢　C	竪穴住居址2	23.8	2.8	−	−	内面：なで	口縁部：列点紋 体部：簾状紋（左→右）	暗褐色	良	
11	甕　A	竪穴住居址2	23.0	3.4	−	−	口縁部：よこなで 内面：へら磨き（横方向）	−	暗赤褐色	精良	煤付着
12	甕　A	竪穴住居址2	10.4	3.4	−	−	内面：なで	−	黄褐色	精良	
13	甕　B	竪穴住居址2	13.9	5.4	−	−	外面：指頭圧痕	−	淡橙色	粗	
14	甕　A	竪穴住居址2	11.8	6.2	−	−	内面：指頭圧痕 外面：へら磨き（縦方向）	−	褐色	粗	
15	底　部	竪穴住居址2	−	3.2	7.6	−	外面：へら磨き（斜方向）	−	暗茶褐色	良・角閃石	生駒西麓産
21	広口壷A	側　溝	32.0	2.4	−	−	−	外面：簾状紋（左→右） 内面：円形浮紋	乳橙色	やや粗	
22	広口壷A	第6層	28.0	1.9	−	−	−	外面：簾状紋 （原体20本／2㎝・左→右）	淡橙色	良	
23	広口壷A	側　溝	26.8	2.8	−	−	口縁部内外面：よこなで 内面：なで	外面：簾状紋の後、刻み目 内面：円形浮紋	明茶褐色	良・角閃石	生駒西麓産・ 口縁部外面に籾痕
24	広口壷B	第5層	13.8	3.0	−	−	−	外面：斜線紋	橙褐色	良	
25	高杯B	側　溝	10.9	1.9	−	−	口縁部内外面：よこなで	−	暗茶褐色	やや精良・ 角閃石	生駒西麓産
26	高杯A	第6層	19.1	2.8	−	−	口縁部内外面：よこなで 内面：刷毛目（横方向）、 外面：へら磨き（横方向）	−	黄茶色	精良	
27	高杯A	第6層	22.3	4.4	−	−	外面：なで	−	灰褐色	良	
28	鉢　E	側　溝	14.1	3.3	−	−	口縁部内外面：よこなで 体部外面:へら磨き(横方向)	口縁部外面：凹線紋	暗褐色	精良	
29	高　杯	第6層	−	1.7	−	10.0	外面：へら磨き（縦方向）、 指頭圧痕	−	茶褐色	良・角閃石	生駒西麓産・ 裾部に黒斑
30	鉢　A	第6層	22.0	3.6	−	−	内面：なで・指頭圧痕	口縁部外面：列点紋 体部外面：凹線紋・直線紋	灰褐色	やや粗	
31	鉢　C	側　溝	28.8	3.8	−	−	口縁部は折り曲げている	口縁部外面：刺突紋	明橙色	やや粗	
32	鉢　C	側　溝	31.0	5.8	−	−	−	外面:貼り付け凸帯の上、刻み目	乳茶褐色	やや精良	
33	鉢　D	側　溝	27.8	7.5	−	−	内面：なで 外面：よこなで	−	茶黄色	やや粗	
34	甕　B	第6層	11.8	3.0	−	−	口縁部内外面：よこなで 体部内面:刷毛目、外面:なで	−	淡橙色	やや粗	

表3　土器観察表

番号	器種	遺構・層位	法量（cm）				技法	紋様	色調	胎土	備考
			口径	器高	底径	裾部径					
35	甕 A	第 6 層	12.9	9.3	−	−	口縁部内外面：よこなで 体部内面：なで・指頭圧痕、 外面：へら磨き（斜方向）	−	黄茶色	精良	
36	甕 B	側溝	30.5	3.8	−	−	口縁部内面：指頭圧痕	口縁部外面：凹線紋	明黄褐色	やや粗	
37	甕 C	第 5 層	31.4	2.2	−	−	内面：なで	口縁部外面：簾状紋（左→右）の後、刻み目	暗茶褐色	良・角閃石	生駒西麓産
38	甕 C	側溝	36.4	7.9	−	−	−	口縁部外面：刺突紋	暗茶褐色	精良・角閃石	生駒西麓産
39	甕 C	側溝	37.0	2.6	−	−	外面：指頭圧痕	口縁部外面：刺突紋	暗茶褐色	粗・角閃石	生駒西麓産
40	底部	第 6 層	−	8.6	6.8	−	内底面：指頭圧痕 外面：へら磨き（縦方向）、指頭圧痕	−	淡橙色	良	
41	底部	第 6 層	−	4.7	7.1	−	内面：指頭圧痕	−	黄茶色	やや精良	
42	底部	第 5 層	−	6.5	6.5	−	−	−	暗褐灰色	やや粗	
43	杯	第 5 層	15.1	3.4	−	−	−	−	黄灰色	やや粗	
44	短頸壺	第 5 層	9.9	2.7	−	−	内外面：回転なで	−	灰青色	密	

表 3　土器観察表

番号	器種	遺構・層位	法量（cm）		種類	胎土	備考
			直径（推定径）	厚さ			
16	紡錘車	竪穴住居址 2	5.6	0.6	土器片	やや粗	孔径5.5mm
17	紡錘車	竪穴住居址 2	4.2	0.7	土器片	良	孔径6.0mm、内面：へら磨き
45	紡錘車	第 6 層	4.6	0.6	土器片	やや粗	孔径8.5mm、内面：なで
46	紡錘車	第 6 層	(3.8)	0.5	土器片	良	孔径4.5mm
47	紡錘車	第 6 層	3.6	0.6	土器片	良	孔径6.0mm

表 4　紡錘車観察表

番号	器種	遺構・層位	法量（mm）				材質	素材の形態	中央断面形	先行剥離面	主剥離面	原面	調整	整形	備考
			長さ	幅	厚さ	雑部径									
18	石鏃	竪穴住居址 2（ピット 3）	43.9	17.2	5.6	−	サヌカイト	縦形剥片	六角形	○	○	基端部		非極厚両	平基式、先端欠損
19	石鏃	竪穴住居址 2	38.1	20.4	6.0	−	サヌカイト	−	五角形	×	×	×	両面	非極厚両	凸基式、先端欠損（使用による折れ）
20	石錐	竪穴住居址 2	43.4	20.2	6.3	3.8	サヌカイト	横形剥片	四角形	○	○	頭端部		非極厚両	素材の打面は調整面
48	石鏃	第 5 層	50.7	14.9	6.7	−	サヌカイト	−	両凸形	×	×	×	両面	非極厚両	凸基無茎式、先端欠損
49	石錐	側溝	39.4	17.2	5.3	3.9	サヌカイト	−	両凸形	×	×	×	両面	非極厚両	頭部欠損、先端わずかに磨滅
50	石錐	第 6 層	33.9	53.2	13.2	1.8	サヌカイト	横形剥片	四角形	○	○	頭端部			素材の打面は原面
51	ピエス・エスキエ	側溝	29.4	37.2	9.9	−	サヌカイト	横形剥片	不等辺三角形	○	○	先端部		平・直・両	両縁に一対細部調整

表 5　石器観察表

4．甲田南遺跡出土の鉄斧について

山田　隆一（大阪府教育委員会）

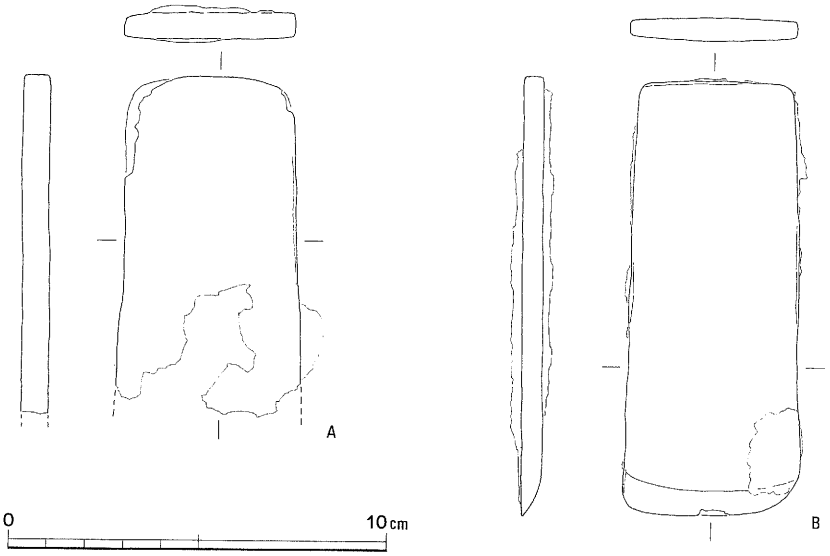
1．はじめに

近年の甲田南遺跡の発掘調査において２点の弥生時代中期に属する板状鉄斧が出土している。１点は大阪府教育委員会による国道３０９号線バイパス建設を原因とする昭和59年度の調査[註1]であり、他の１点は富田林市教育委員会による個人住宅建設を原因とする平成５年度の調査においてである。筆者は、前者については（財）元興寺文化財研究所在職当時に、後者については富田林市教育委員会のご厚意[註2]によって観察する機会を与えられた関係でここに報告し、その考古学的な位置付けについて述べる。

2．甲田南遺跡出土の板状鉄斧（挿図９・図版１２）

ここでは、大阪府教育委員会の調査で出土した資料を「甲田南鉄斧Ａ」、富田林市教育委員会の調査で出土した資料を「甲田南鉄斧Ｂ」として以下に報告する。

ａ）甲田南鉄斧Ａ　刃部側は欠損しており、全長は不明である。法量は残存長9.0cm、頭部幅（復元）4.2cm、身部幅4.5～4.6cm、刃部側の残存最大幅4.9cm。厚さについては錆化のため確実ではないが、復元すれば周縁部分が0.7cm、身部中央付近で0.1～0.2cm程度増加すると考えられ



挿図９　甲田南遺跡出土の板状鉄斧

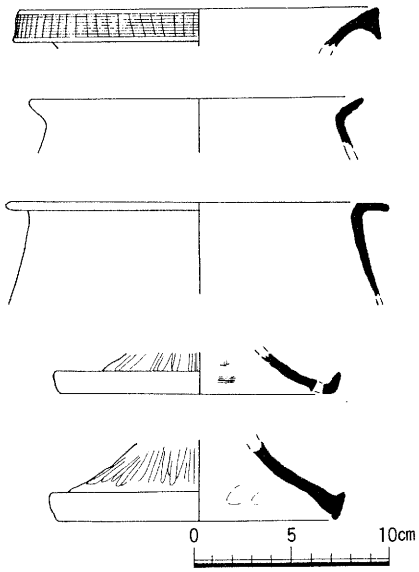
る。甲田南鉄斧Ｂよりも若干重量感がある。平面形態は隅丸の頭部と身部中央付近から刃部に向って若干バチ状に広がっており、木柄に装着した際に鉄斧の固定を強固にする意図があったと考えられる。刃部の欠損により加工斧とも伐採斧とも断定しにくい。

遺物は表面に限って層状剥離を生じており、鍛造品と考えることが自然であるが、その一方で刃部側はブロック状に割れており鋳造品的で奇異に感じた。それについては、「化学分析からみるとＣ量が3.27％もあり、明らかに鋳鉄である。」とする日立金属株式会社安来工場冶金研究所の分析結果[註3]とも符合する。

ｂ）甲田南鉄斧Ｂ　完存品。法量は全長11.5cm、頭部幅4.1cm、身部中央の幅4.5cm、刃部幅4.6cmである。厚さは周縁部分が0.4cm、身部中央付近で0.55～0.60cm程度でいくぶんレンズ状を示している。平面形態は頭部から刃部に向って若干広がるが、甲田南鉄斧Ａほどにバチ状は呈さない。刃部の平面形態は図の右側がより大きく研ぎ減っており、側面形態は極めて明瞭な片刃で表面（平面図裏面）は全くの平坦である。片刃であり、近畿地方出土鉄斧の法量分布（第３図）の状況からいくぶん大型の加工斧と判断される。

甲田南鉄斧Ａと同様表面に限って薄皮１枚の層状剥離を生じており、本来極めて良質な鉄斧であったと推察できる。サビ取り前にエックス線撮影を行なったが、特別な状況は観察されなかった。化学的分析はなし。

以上の２点の鉄斧はいづれも竪穴式住居址から出土しており、土器も共伴している。にもかかわらず、その時期的な位置付けについてはかならずしも明確ではない。それは共伴する土器が少量で、しかも細片であるために指標となる壷形土器等の器形が不明確なことにつきる。第２図は甲田南鉄斧Ａの共伴土器である。従来、この土器は「第Ⅲ－Ⅳ期」として報告[註1]されてきた資料であるが、近年の土器編年[註4]から壷形土器口縁部の櫛描簾状文の単位、高杯脚部の形状等から第Ⅳ期前半の中でとらえておきたい。甲田南鉄斧Ｂについてもこの報告の中で同様の位置付けがなされている。



挿図１０　甲田南鉄斧Ａの共伴遺物

(註１文献より転載)

３．甲田南鉄斧の占める位置

近畿地域での明確に弥生時代に属する鉄斧出土例は必ずしも多くない（第１表参照）。鋳

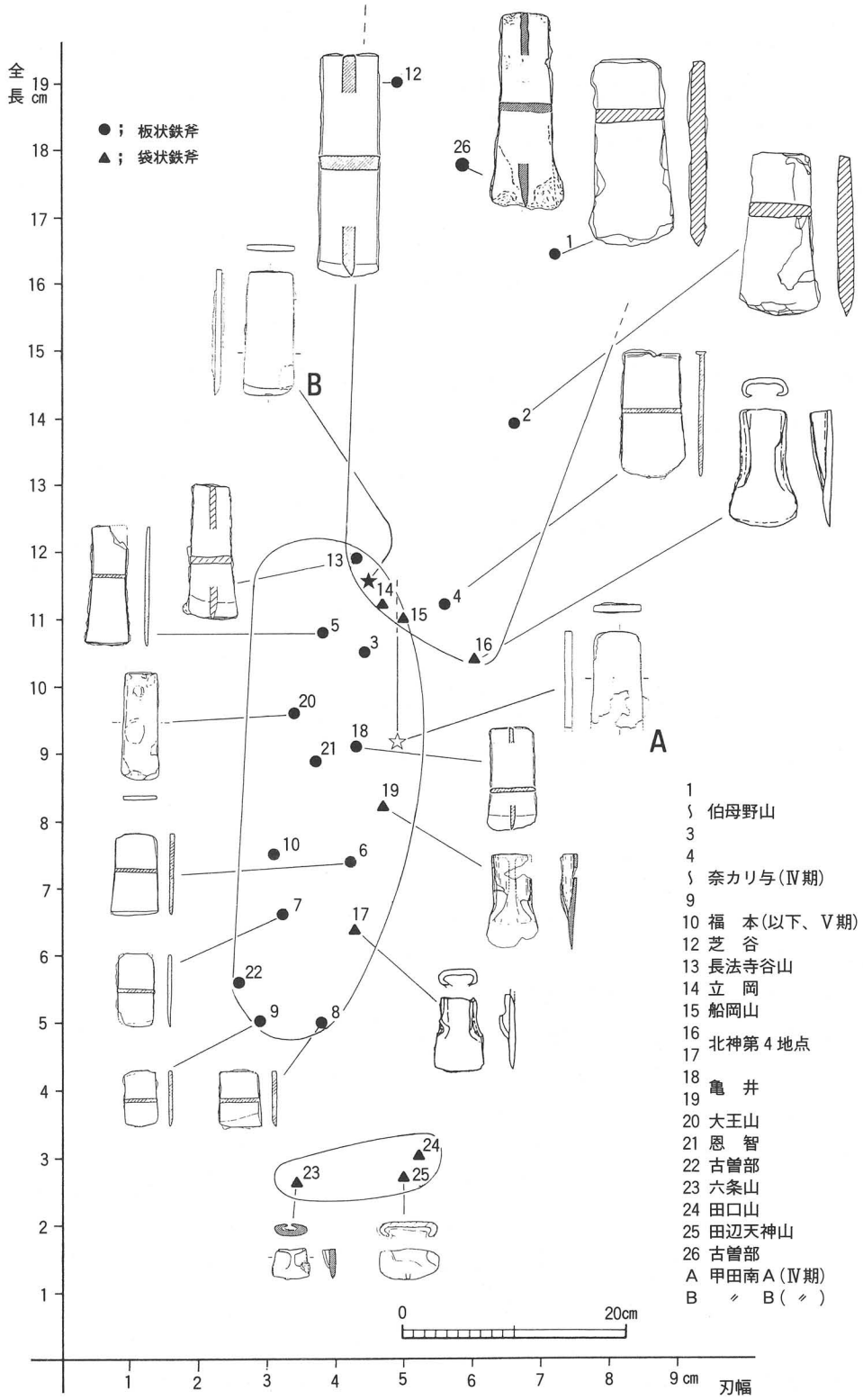
造鉄斧を除外すれば、第Ⅳ期で７遺跡１８例（内、袋状が１遺跡２例）、第Ⅴ期で１１遺跡１３例（内、袋状が４遺跡４例）である。少数のため明言は避けねばならないが、中期後半から後期にかけて出土する遺跡の増加は認められそうである。袋状鉄斧は木製斧柄の増加からも、やはり中期後半から後期にかけて増加する。第１表からもわかるように、一部の鋳造鉄斧以外は近畿地域への鉄斧の流入は第Ⅳ期以降であり、甲田南遺跡の板状鉄斧は初期の資料である。

機能的には木柄と鉄斧刃部を平行に装着して伐採を主機能とする縦斧と、斧刃部を直角に装着して加工を主機能とする横斧に分類されている。また、刃部には両刃と片刃の別があり、通常縦斧は両刃で大型品、横斧は片刃で小型品になる傾向がある。近畿地方の弥生時代鉄斧

表６　近畿地方の弥生時代鉄斧時期別一覧表

府県名	時期／Ⅰ～Ⅲ期	Ⅳ　期	Ⅴ期（前半）　同（中頃）　同（後半）
兵庫(板状)		奈カリ与(８) 伯母野山(３)－－－－－－－ 福本(１) 名古山(１)	会下山（鋳・１） －－－－－－－
(袋状)	新方（鋳・１） 参･玉津田中(木柄･１) (鋳造鉄斧用？)	北神第４地点(２)	立岡(1)－－
京阪(板状)	扇谷(鋳・１)－－	－－神足(１)－－ －－－－途中ケ丘(鋳・１)－－－－	長法寺谷山(１)
(袋状)			田辺天神山(１)
滋賀(袋状)			参･服部(木柄･1)
大阪(板状)		甲田南(２)	芝谷(１)　彼方(１) 古曽部(２) 恩智(１) 亀井(１)
(袋状)		参・若江北（木柄・１）	亀井(１) 参・亀井（木柄・２）　参･瓜生堂(木柄･1)
奈良(板状)			大王山(１) －－－－唐古(１)－－－－
(袋状)			六条山(１)

※表中の（板状）は板状鉄斧、（袋状）は袋状鉄斧を示す。また、「鋳」は鋳造品、「参」は参考資料としての木製鉄斧柄である。一部に庄内併行期の資料を含む。
他に数点の資料があるが、所属時期、器種の認定等不明確なものは除外した。和歌山県は該当資料なし。



挿図１１　近畿地方出土鉄斧の法量

では縦斧と横斧の分離が全長10～11cm付近にある[註5]（第１図参照）。甲田南鉄 斧Ｂは全長11.5cm、片刃で若干大型の加工斧と考えたい。甲田南鉄斧Ａについては、甲田南鉄斧Ｂよりも若干大きくなりそうで、第１図上では伐採斧の範囲に入る可能性はある。

以上の検討から、近畿地方の弥生時代鉄斧における甲田南鉄斧Ａ、Ｂの占める位置については下記のようにまとめたい。

１．時期的には弥生時代中期後半（第Ⅳ期前半）に属しており、近畿地域出土の板状鉄斧としては最も古い一群に属する。ただし当初第Ⅲ－Ⅳ期とされていたように、その共伴する土器の編年的位置付けともからめてより明確にされねばならない。

２．甲田南鉄斧Ｂについては片刃であること、その法量から加工斧として使用されたと考えられる。甲田南鉄斧Ａについては刃部側が破損しているために不明である。甲田南鉄斧Ｂに比べてよりバチ状を呈しやや厚みもあり、伐採斧としての可能性も残されていると言うにとどめる。

最後になったが、小稿を成すにあたって下記の方々のお世話になった。記して感謝いたします。

置田雅昭、桑原久男（天理大学）、中辻 亘、粟田 薫（富田林市教育委員会）、小林義孝、岩瀬 透（大阪府教育委員会）、渡辺智恵美（(財)元興寺文化財研究所）。

(註)

註１.小林義孝『甲田南遺跡発掘調査概要・Ｖ』大阪府教育委員会1985.3なお,本概要には日立金属株式会社安来工場冶金研究所による甲田南鉄斧Bの分析結果も掲載されている（清永欣吾「付1甲田南遺跡Ⅲ区4-A住居跡出土鉄斧の化学分析」）。

註２.富田林市教育委員会の中辻 亘、粟田 薫氏にお世話になった。記して感謝いたします。なお,甲田南鉄斧Bの錆取りについては,置田雅昭先生,ならびに桑原久男先生の御厚意により天理大学考古学研究室のｴｯｸｽ線装置,並びに保存処理施設を使用させていただいた。記して感謝いたします。

註３.註1の文献による。甲田南鉄斧Aの分析結果では「C量が3.27%もあり,明らかに鋳鉄である。」としつつも,顕微鏡組織観察,ｴｯｸｽ線透過試験などから「むしろ部分的に炭素量の異なった鍛鋼である可能性が強い。」とされている。また,出土状況から「炭素量3.27%は外部からの有機質などの侵入によって富化した」とも判断されている。妥当な判断と考えるが,甲田南鉄斧Bも同様の状況であることが気掛かりである。未分析資料でもあり素人判断は避けねばならないが,今後なんらかの炭素処理等がなされたのではないか等も含めて検討されねばならない。

註４.寺沢 薫・森井貞雄「１河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ｉ』木耳社 1989.6

註５.拙稿「近畿弥生社会における鉄器化の実態について」『網干善教先生華甲記念 考古学論集』網干善教先生華甲記念会 1988.9

Ⅳ 中 野 遺 跡

中野遺跡は、富田林市若松町５丁目、中野町１丁目、２丁目を中心とする地域に広がる。遺跡は海抜５０～６０ｍ前後の石川西岸に広がる河岸段丘上に位置している。過去の調査で縄文時代から歴史時代にわたる複合遺跡であることが判明している。遺跡は中央を南北に走る旧国道１７０号線によって東西に２分された形になっているが、弥生時代の遺構は東側に認められる。

挿図１２ 中野遺跡発掘調査地位置図

挿図１３　調査区位置図

ＮＮ９３

調 査 地：富田林市中野町２丁目４９５他

調査面積：１１㎡

今回の調査地は、中野遺跡東半部の北端に位置し、南北に延びる旧街道である東高野街道から東方の石川に向かう市道の一部である。

調査は、下水道工事に伴う遺構の範囲確認調査を目的とし、平成５年１１月２９日から１２月２日まで実施した。

1．層 序

基本的な層序は、２０ｃｍの厚さの盛土があり、その直下で遺構の堆積層になる。

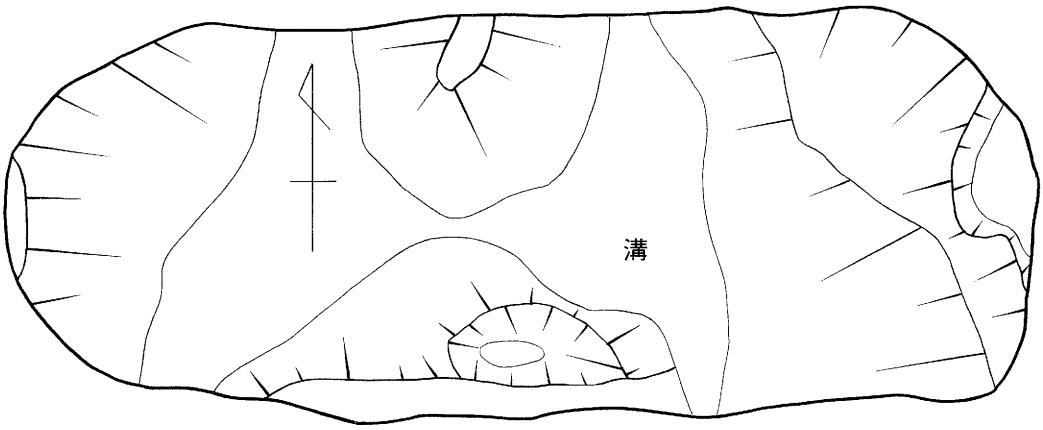
2．遺 構

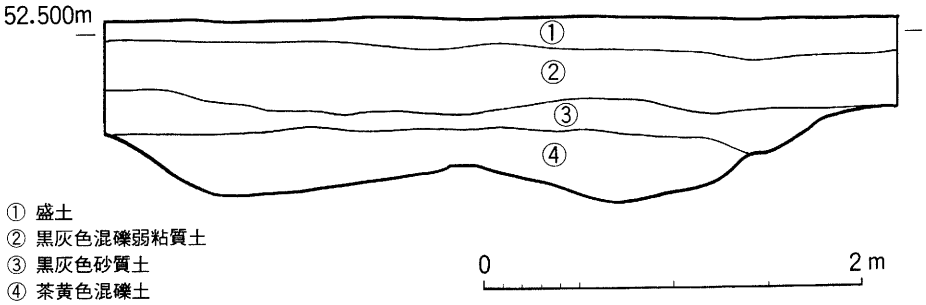
溝を１条検出した。

溝

南北方向に延びる溝である。調査区内では東西５．５ｍ、南北２ｍ分を検出した。検出状況からみて、ほぼ溝の中心部分にあたると思われる。北側断面では、最も深いところで約90cmを測る。東西両肩は調査区外にあたるため、溝の幅は不明である。溝の堆積は３層あり、上から順に第１層の黒灰色礫混じり弱粘質土が厚さ約２５cm、第２層の黒灰色砂質土が約10cm、第３層の茶黄色礫混じり土が約４０cm堆積する。

（今西）





挿図１４　遺構平面・断面図

3．遺 物

今回の調査で出土した遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、須恵質土器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦の他、埴輪、サヌカイト製の石器、安産岩製の石斧、砂岩片がある。これらはすべて溝から出土した。遺物は遺構の項ですでに述べたとおり３層に分層して取り上げたが時期差はない。

以下、出土層位に関係なく、弥生土器から、上述の順に概観した後、図化した遺物については観察表にして詳述する。

弥生土器

器種が分かるのは高杯１点だけである。杯部と脚部の接合は円盤充填法で作られている。底部片(１)が５点出土している。紋様構成としては簾状紋、波状紋、直線紋があるが、簾状紋の原体幅は幅狭と幅広の両方認められる。

土師器

細片しか出土していないので、器種、時期とも分からない。

須恵器

古墳時代の甕(２)と蓋杯、奈良時代の杯が出土している。

瓦器

銀黒色を呈する椀が１点出土している。

土師質土器

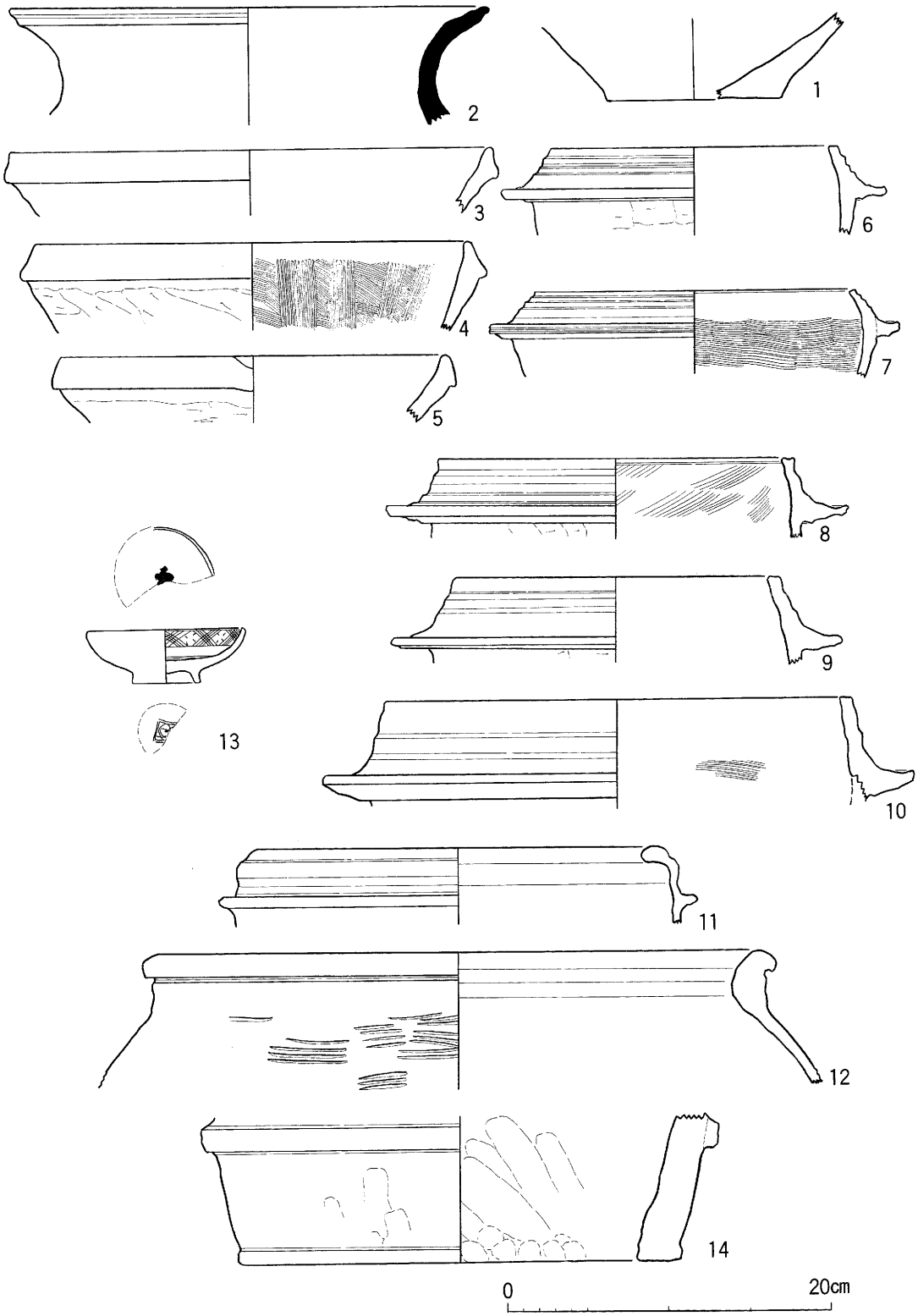
羽釜(１１)と火舎が１点づつ出土している。

須恵質土器

練鉢(３～５)が４点出土している。

瓦質土器

羽釜(６～１０)が９点、甕(１２)が３点出土している。



挿図１５　溝出土土器

陶器

擂鉢が１点、甕が２点出土している。

磁器

青磁片と伊万里焼の杯（１３）が１点出土している。

瓦

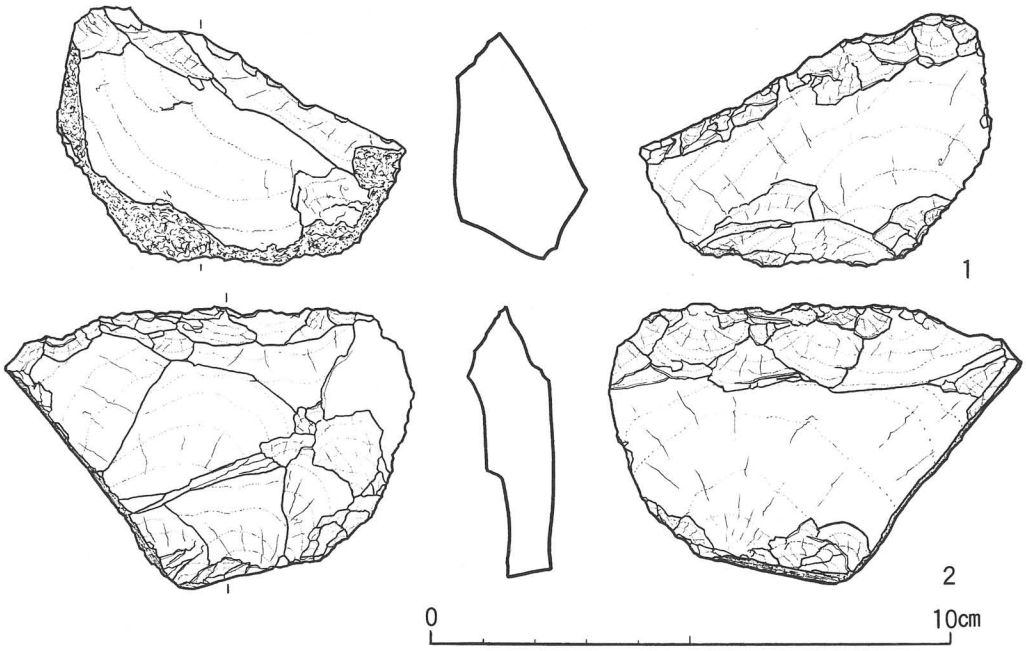
平瓦と丸瓦が出土している。平瓦には１点、須恵質のものがある。縄目とヘラケズリで調整されている。

埴輪

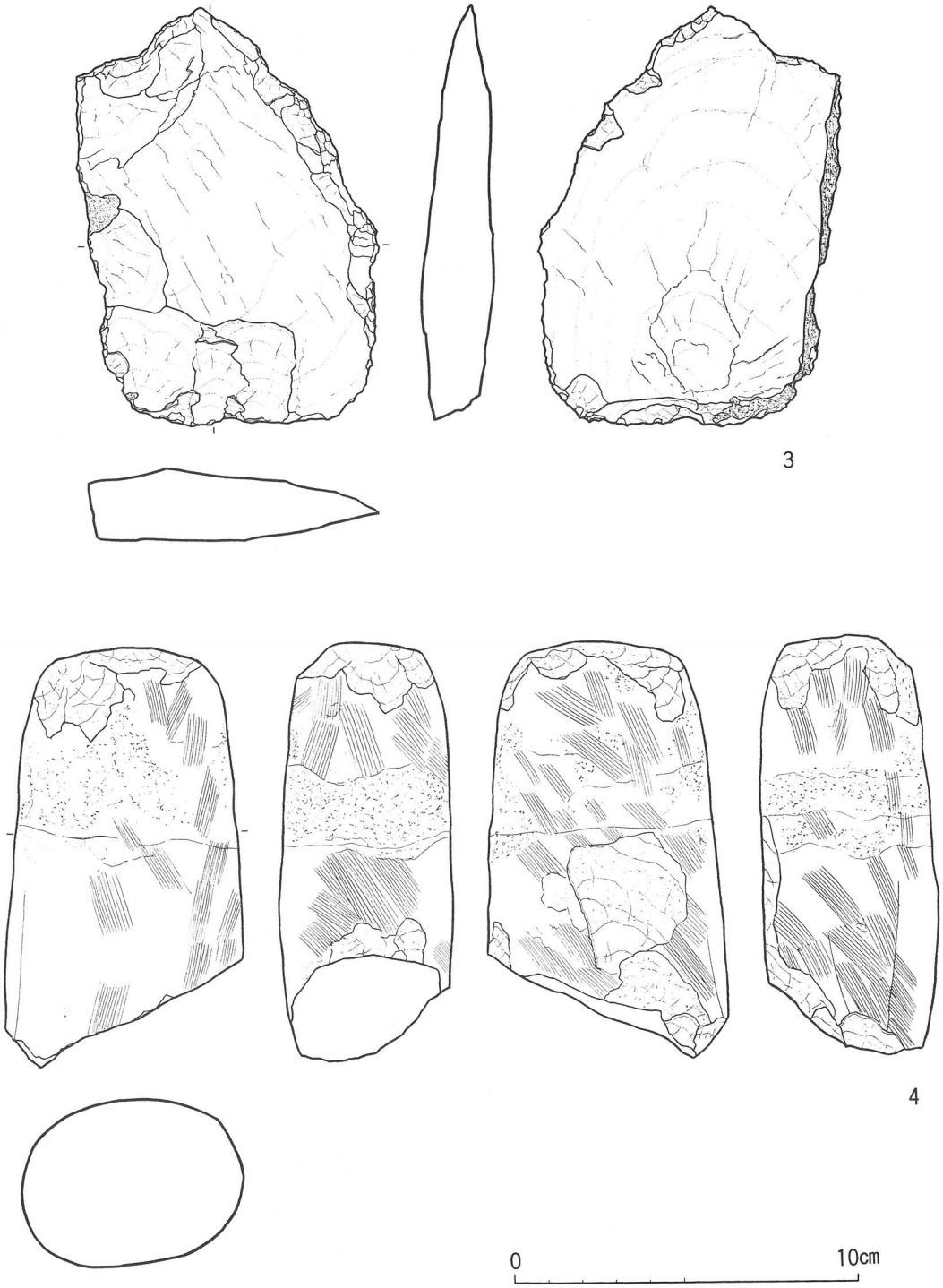
中型の円筒埴輪が１点出土している。

サヌカイト製の石器

削器(１～３)が３点出土している。(１)は横形剥片を素材にした直刃削器、(２)は横形剥



挿図１６　溝出土石器



挿図１７　溝出土石器

片を素材にした複刃削器、(３)は縦形剥片を素材にした複刃削器である。

これらの他に、細部調整剥片３７点、石核が１７点、剥片が３点出土している。細部調整剥片及び剥片の内訳は横形剥片が１９点、縦形剥片が２０点、不明が１点である。打面の状況は原面打面のもの２１点、剥離面打面のもの７点、調整打面のもの１点、不明のものが１１点である。

太形蛤刃石斧

安山岩製の太形蛤刃石斧(４)が１点出土している[註1]。刃部は欠失しているため、正確な大きさは不明であるが、推定長１５cm前後を測ると思われる。頭部は敲打痕が認められるが、磨滅のため鈍くなっている。残存部分のほぼ中央部を境にして、刃部側が黒変していていることから、木柄に挿入していた部分が頭端部から約５.５cmの範囲にあったことがわかる。

（粟田）

４．まとめ

調査地の中野遺跡は、弥生時代から中世に至る複合遺跡で、広範囲に集落跡が検出されている。

今回出土遺物には弥生時代から近世のものがあるが、中世遺物が大半を占める。このことから、溝は中世のころには機能していたと推測される。溝の性格、規模等は調査面積が狭小なため、不明な点が多いが、周辺の調査結果では、中世の建物跡が検出されており、調査地周辺が、西から東に緩やかに傾斜する地形であることから、この溝が地形に沿わない南北方向のものであることを合わせると、建物に伴うものとも推測される。詳細については、今後の周辺調査での結果を待ちたい。

（今西）

（註）

註１　石材の種類は大阪府立富田林高等学校の森山義博氏に鑑定して頂いた。

番号	器種	遺構・層位	法量(cm) 口径	器高	底径	鍔部径	技法	紋様	色調	胎土	備考
1	甕	溝(第1層)	29.7	7.3	−	−	内外面：回転なで	−	灰色	密	口縁部内面・頸部外面:自然釉付着　須恵器
2	底部	溝(第3層)	−	5.4	10.8	−	−	−	黄茶色	良	黒班 弥生土器
3	練鉢	溝(第3層)	30.0	4.2	−	−	内外面：回転なで	−	灰色	やや	口縁部外面：自然釉付着　須恵質土器
4	すり鉢	溝(第2層)	27.1	5.6	−	−	口縁部内外面：よこなで 内面：刷毛目、外面：へら削り	−	黒灰色	精良	すり目は約2cm幅 須恵質土器
5	練鉢	溝(第2層)	23.9	4.2	−	−	口縁部外面：よこなで 体部外面：へら削り（横方向）	−	暗灰色	精良	須恵質土器
6	羽釜	溝(第2層)	17.7	5.6	−	24.0	口縁部・鍔部内外面：よこなで 体部内面：なで、外面：へら削り	−	灰褐色	精良	瓦質土器
7	羽釜	溝(第2層)	19.9	5.4	−	25.6	口縁部・鍔部外面：よこなで 体部内面：刷毛目（横方向）	−	褐灰色	精良	体部外面：煤付着 瓦質土器
8	羽釜	溝(第1層)	22.1	5.1	−	28.8	口縁部・鍔部外面：よこなで 内面：なで・刷毛目（斜方向） 体部外面：へら削り（横方向）	−	灰黒色	精良	瓦質土器
9	羽釜	溝(第1層)	20.2	5.6	−	28.1	口縁部内外面・鍔部外面：よこなで 体部内面：なで、外面：へら削り	−	灰色	精良	瓦質土器
10	羽釜	溝(第1層)	19.0	6.7	−	36.7	口縁部内外面・鍔部外面：よこなで 体部内外面：なで・刷毛目（斜方向）、 外面：へら削り	−	黒灰色	精良	瓦質土器
11	羽釜	溝(第2層)	24.4	4.9	−	29.7	口縁部内外面・鍔部外面：よこなで 体部内面：なで	−	白黄灰色	精良	土師質土器
12	甕	溝(第3層)	37.4	8.5	−	−	口縁部内外面・体部内面：なで 体部外面：平行たたきをなで消している。	−	灰茶色	精良	瓦質土器
13	杯	溝(第2層)	9.8	3.4	4.3	−	−	口縁部内面：四方襷紋 見込み：圏線・五弁花紋 （コンニャク印判）	青白色	−	磁器（伊万里焼） 高台内に銘あり・五弁花紋はくずれている
14	埴輪	溝(第2層)	−	9.2	27.6	−	内外面：なで 内面：指頭圧痕	−	淡黄茶色	精良	凸帯断面：台形

表7 土器観察表

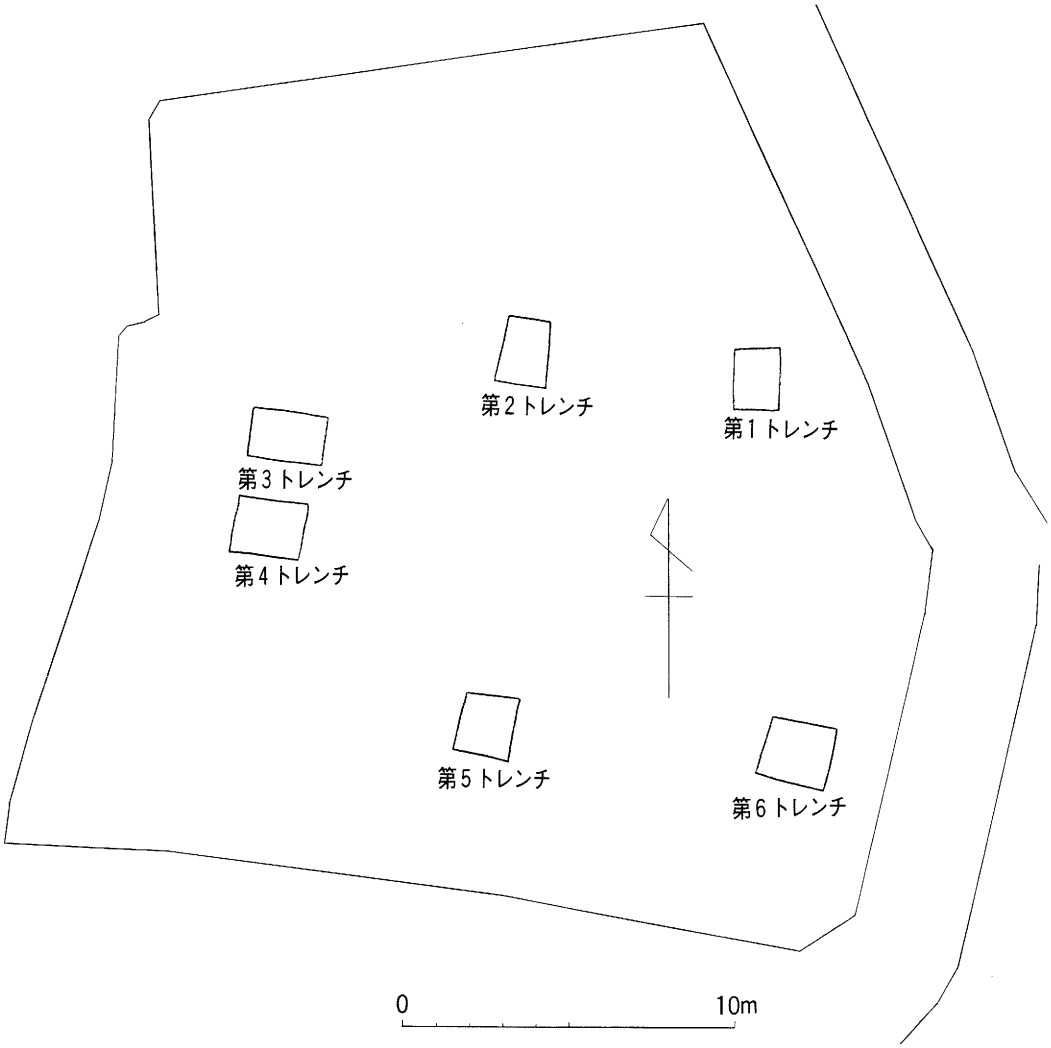
番号	器種	遺構・層位	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	材質	素材の形態	中央断面形	先行剥離面	主剥離面	原面	刃部の調整	備考
1	直刃削器	溝(第2層)	44.3	68.5	25.5	サヌカイト	横形剥片	五角形	○	○		薄・深・直・裏	
2	複刃削器	溝(第2層)	55.3	79.6	17.0	サヌカイト	横形剥片	五角形	○	○	基端部 左側面	薄・深・凸・両 薄・深・凸・表	
3	複刃削器	溝(第1層)	123.9	83.5	21.3	サヌカイト	縦形剥片	不等辺三角形	○	○	左側面	薄・深・凸・表	
4	太形蛤刃石斧	溝(第3層)	125.0	70.2	50.6	安山岩	−	楕円形	−	−	−		刃部欠損

表8　石器観察表

Ⅴ．錦聖遺跡

錦聖遺跡は、市域の南部に位置し、羽曳野丘陵の裾を南北に走る国道１７０号線（大阪外環状線）の東に接して広がっている。その範囲は、東西350 m、南北1,300 mと南北に長い。市域南部における集落遺跡の多くは、市内中央を流れる石川によって形成された低位段丘上に立地しているのに対して、中位段丘上に立地しているのが特徴である。本遺跡は、1971～1976年にかけて富田林市教育委員会が実施した分布調査によって確認されたものである。その後、1983年の本格的な発掘調査によって、中世の集落跡であることが判明した。

挿図１８　錦聖遺跡調査地位置図



挿図１９　調査地位置図

ＫＳＩ９３

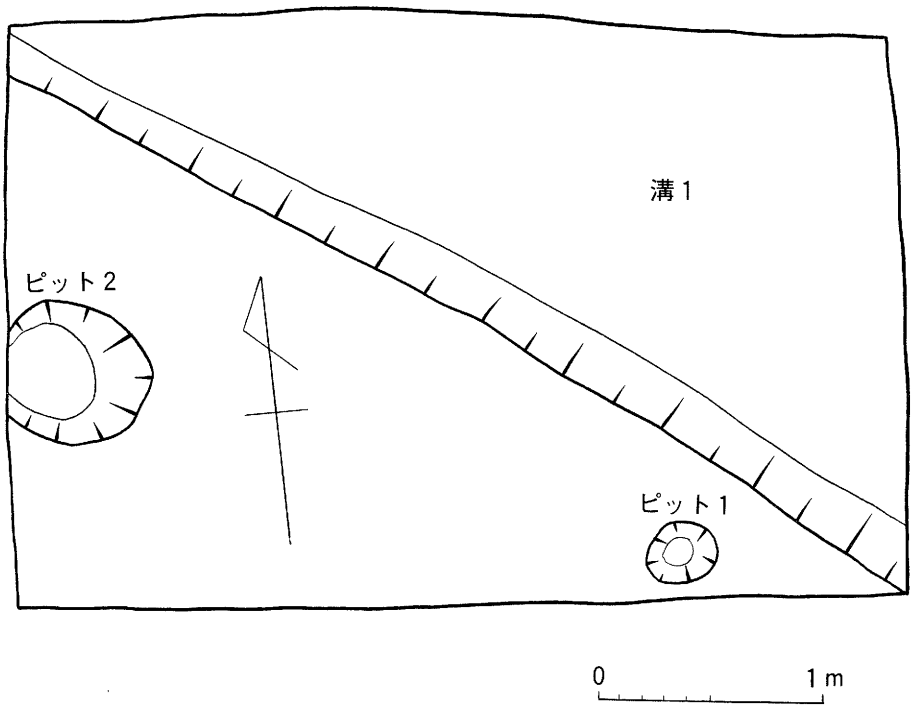
調 査 地：富田林市錦織1619の一部

調査面積：19㎡／313.72㎡

調査地は、遺跡の南東部にあって、中位段丘の縁辺に位置する。現況は水田である。

住宅建設に伴うもので、６箇所（第１～６トレンチ）の小規模な調査区を設定し、人力掘削によって発掘調査を実施した。

調査の結果、第１トレンチ及び第２トレンチにおいては、遺構は検出されなかった。以下、



挿図２０　第３トレンチ平面図

遺構が検出された第３～６トレンチについて詳細に述べる。

１．第３トレンチ

北西部に位置する。東西２ｍ、南北1.5ｍのトレンチである。基本層序は、上から順に第１層・耕土（15cm)、第２層・床土（５cm) である。第２層直下は、黄褐色混礫弱粘質土の地山である。 検出した遺構はピット２、溝１である。

ピット１

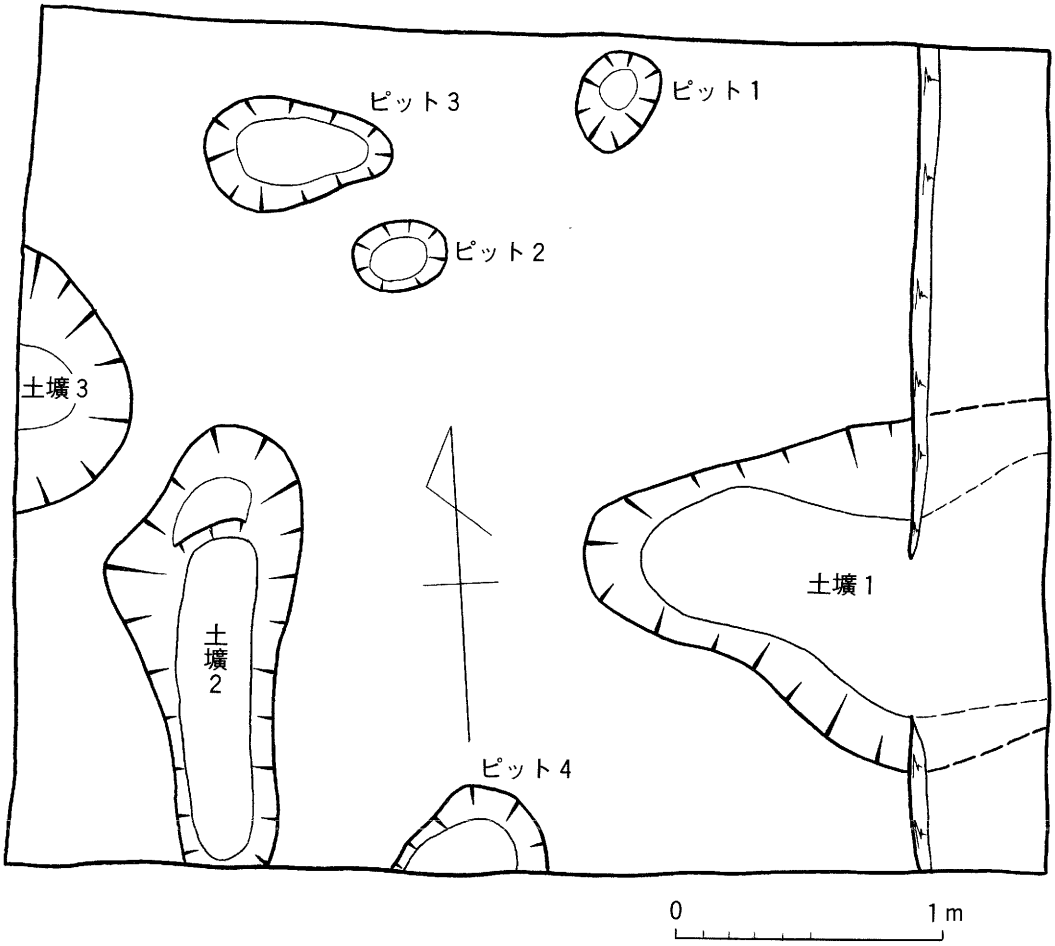
調査区の南東端部にある。平面形は楕円形で、東西径20cm、南北径14cm、深さ17cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。

ピット２

調査区の西端部にある。遺構の一部が西壁内にあるため、正確な規模は不明である。深さは36cmを測る。埋土はピット１と同じく暗灰褐色土で、土師器、瓦器片を含む。

溝１

調査区の北東部にある。底の高低差から北西から南東方向に流れる溝と思われる。検出面で



挿図２１　第４トレンチ平面図

はほぼ直線に延びる。最も深いところで、15cmを測る。埋土は灰褐色土である。

２．第４トレンチ

第３トレンチの南に位置する。東西２m、南北1.6 mのトレンチである。基本層序は、上から順に第１層・耕土（18cm)、第２層・床土（５cm)、第３層・灰黄色土（１cm)、第４層・茶灰色土（１cm)、第５層・灰褐色土（６cm）である。第５層直下は地山である。第３層及び第４層は旧水田に伴う堆積層で、旧耕土と床土に当たる。第５層からは、土師器、瓦器、須恵質土器が出土している。第３トレンチとの距離は、約１mと近接しているにもかかわらず、第２層以下の堆積層の違いは、旧地形の差、つまり、トレンチ間に旧水田の境界があったことによるものと思われる。 検出した遺構はピット４、土壙２である。

ピット１

調査区の北端部にある。平面形は楕円形で、東西径14cm、南北径20cm、深さ４cmを測る。埋土は灰褐色土である。

ピット2

調査区の北西部にある。平面形は楕円形で、東西径18cm、南北径13cm、深さは5cmを測る。埋土は灰褐色土で、須恵質土器を含む。

ピット3

調査区の北西端部にある。平面形は楕円形で、東西径35cm南北径22cm、深さ6cmを測る埋土は灰褐色土である。

ピット4

調査区の南端部にある。遺構の一部が南壁内にあるため、正確な規模は不明である。深さは8cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。

土壙1

調査区の東端部にある。遺構の一部が東壁内にあるため、正確な規模は不明である。東壁部分での深さは8cmを測る。埋土は灰褐色土で、須恵質土器を含む。

土壙2

調査区の南西部にある。遺構の一部が南壁内にあるため、正確な規模は不明である。遺構の北端には、9cmの深さのテラスがある。深さは、最も深いところで　　cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。

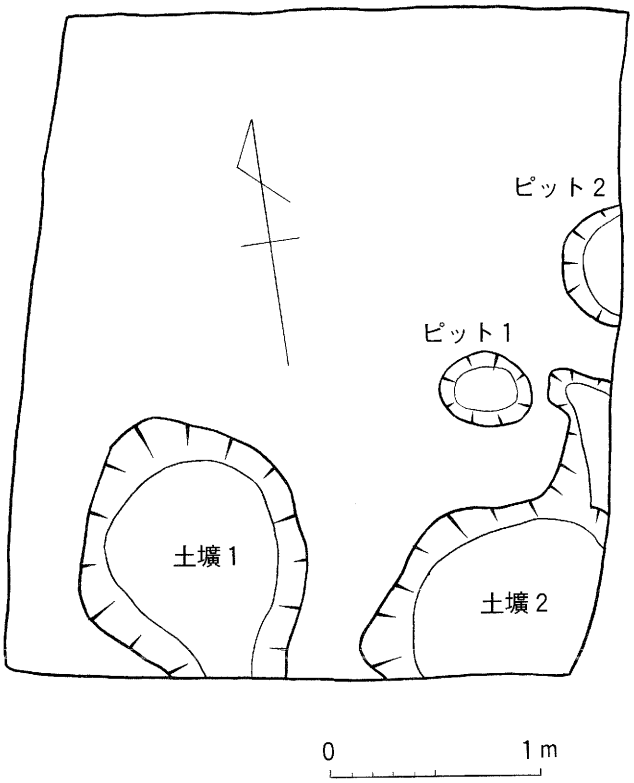
土壙3

調査区の西端部にある。遺構の一部が西壁内にあるため、正確な規模は不明である。西壁部での深さは10cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。

3．第5トレンチ

南部に位置する。東西1.6m、南北1.7mのトレンチである。基本層序は第4トレンチとまったく同様である。各堆積層の厚さも同様である。第3層からは、瓦質の羽釜が出土している。

検出した遺構はピット2、土壙2である



挿図２２　第５トレンチ平面図

ピット１

調査区の東半部のほぼ中央にある。平面形は楕円形で、東西径22cm、南北径18cm、深さ15cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。

ピット２

調査区の東端部にある。遺構の一部が東壁内にあるため、正確な規模は不明である。深さは５cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。

土壙１

調査区の東端部にある。遺構の一部が東壁内にあるため、正確な規模は不明である。深さは、最も深いところで26cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。

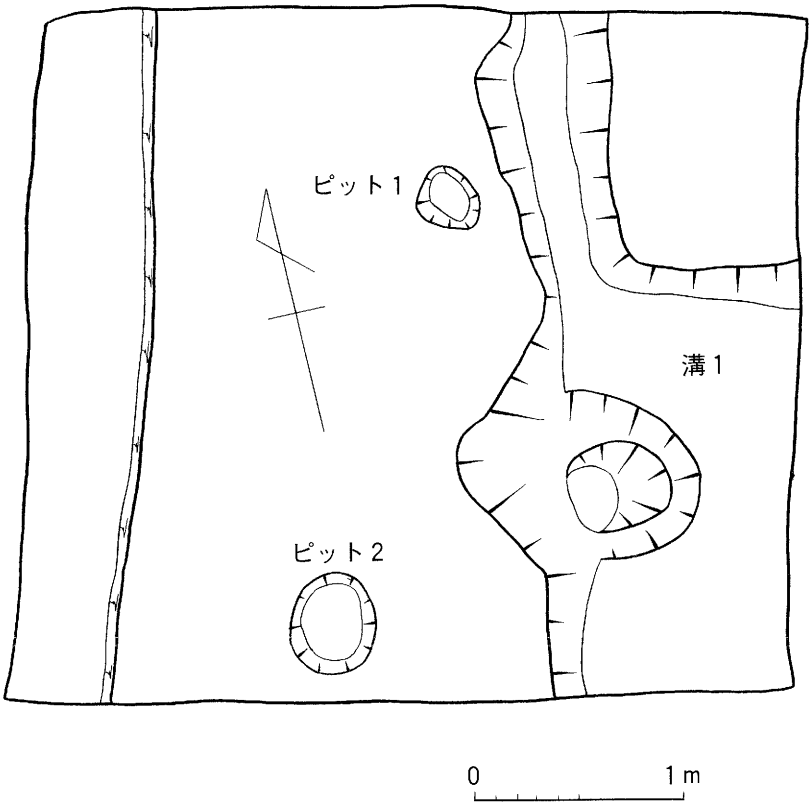
土壙２

調査区の南東端部にある。遺構の一部が南壁内にあるため、正確な規模は不明である。遺構の北端には、２～６cmの深さのテラスがある。深さは、最も深いところで12cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。

４．第６トレンチ

南東部に位置する。東西２m、南北1.7 mのトレンチである。基本層序は、上から順に第１層・耕土（20cm）、第２層・床土（６cm）、第３層・灰褐色土（10cm）である。第３層直下は地山である。第３層は第４・５トレンチでの第５層に該当するものである。この第３層からは、土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、磁器が出土している。

検出した遺構はピット２、溝１である。



挿図２３　第６トレンチ平面図

ピット１

調査区の北半部のほぼ中央にある。平面形は、ほぼ楕円形で、東西径14cm、南北径17cm、深さ４cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。

ピット２

調査区の南端部にある。平面形は楕円形で、東西径20cm、南北径25cm、深さ11cmを測る。埋土は灰褐色土で、土師器片を含む。

溝１

調査区の東半部にある。底の高低差から北から南方向に流れる溝と思われる。北側は、22～32cmの幅で南北方向に延び、南側では大きく東に広がる。南側の西肩付近には、楕円形のピットがある。東西径59cm、南北径40cm、深さ18cmを測る。深さは、北で４cm、南で７cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。

（中辻）

5．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、須恵質土器、瓦質土器、磁器がある。調査は遺構の項で述べたとおり、6ヶ所行われたが、そのうち遺物が出土したのは第3トレンチ、第4トレンチ、第5トレンチ、第6トレンチだけである。

以下、トレンチ毎に出土遺物を概観した後、図化した遺物については観察表にして記述する。

第3トレンチ出土遺物

ピット2から土師器と瓦器が出土してる。土師器には小皿、杯、甕が各1点づづある。瓦器は椀が1点ある。

第4トレンチ出土遺物（挿図24・図版13）

土壙1から須恵質の練鉢(6)が1点、ピット2から須恵質土器が出土している。

包含層(第5層)から土師器、瓦器、土師質土器、須恵質土器、瓦質土器が出土している。

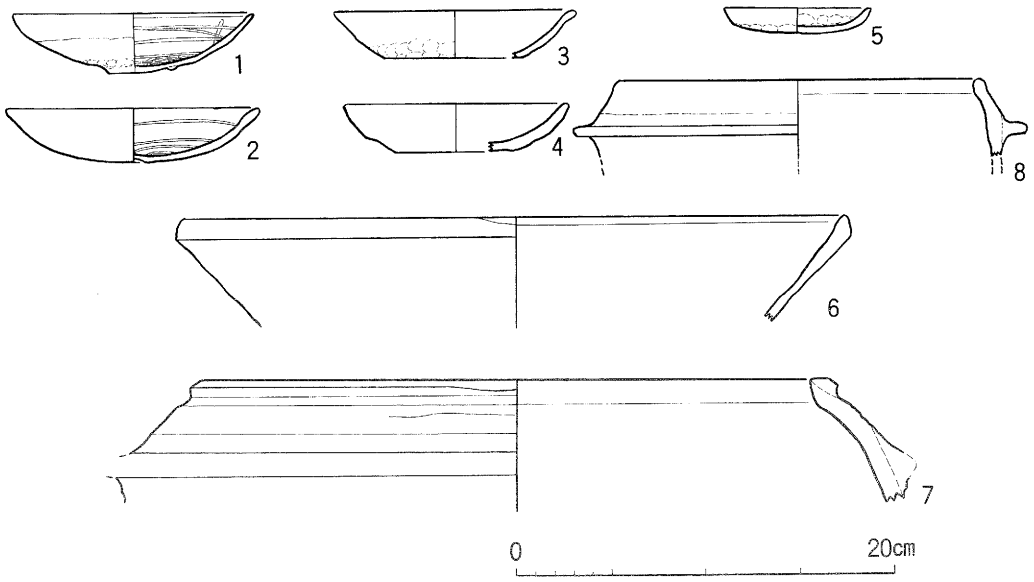
土師器は小皿(5)が3点、杯(3・4)が5点出土している。

瓦器は椀(1・2)が4点出土している。椀はすべて高台が形骸化していて、高さが1mm程度しかない。

土師質土器は羽釜(7)が1点ある。

須恵質土器は練鉢が1点ある。

瓦質土器は鉢が1点ある。



挿図24　第4・第5トレンチ出土遺物

第５トレンチ出土遺物（挿図２４）

包含層(第３層)から瓦質の羽釜(８)が１点出土している。

第６トレンチ出土遺物

包含層(第５層)から土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、磁器が出土している。

土師器には小皿５点、甕１点がある。小皿の内、１点はへそ皿である。

他の土器及び、磁器は細片のため器種は分からない。　（粟田）

番号	器種	遺構・層位	法量（cm）				技法	紋様	色調	胎土	備考
			口径	器高	底径	鍔部径					
1	椀	第５層 第４トレンチ	12.8	3.4	3.6	－	口縁部内外面：よこなで	暗紋	灰色	精良	高台はつぶれている 瓦器
2	椀	第５層 第４トレンチ	13.2	2.9	－	－	内外面：よこなで	暗紋 (圏線)	灰白色	良	わずかに高台の痕跡がある 瓦器
3	杯	第５層 第４トレンチ	12.6	2.5	7.2	－	口縁部内外面：よこなで 外面：指頭圧痕	－	灰白色	良	土師器
4	杯	第５層 第４トレンチ	11.8	2.6	6.0	－	内外面：よこなで	－	橙色	良	外面：炭化物付着 土師器
5	小皿	第５層 第４トレンチ	7.8	1.4	5.3	－	内外面：なで 底部内外面：指頭圧痕の後、なで	－	淡黄色	良	土師器
6	練鉢	土壙１ 第４トレンチ	35.0	5.6	－	－	内外面：回転なで	－	灰青色	密	須恵質土器
7	羽釜	第５層 第４トレンチ	46.6	7.0	－	－	内外面：よこなで	－	明茶色	良	土師質土器
8	羽釜	第３層 第５トレンチ	18.9	4.2	－	23.8	内面：なで	－	暗灰色	良	瓦質土器

表９　土器観察表

６．まとめ

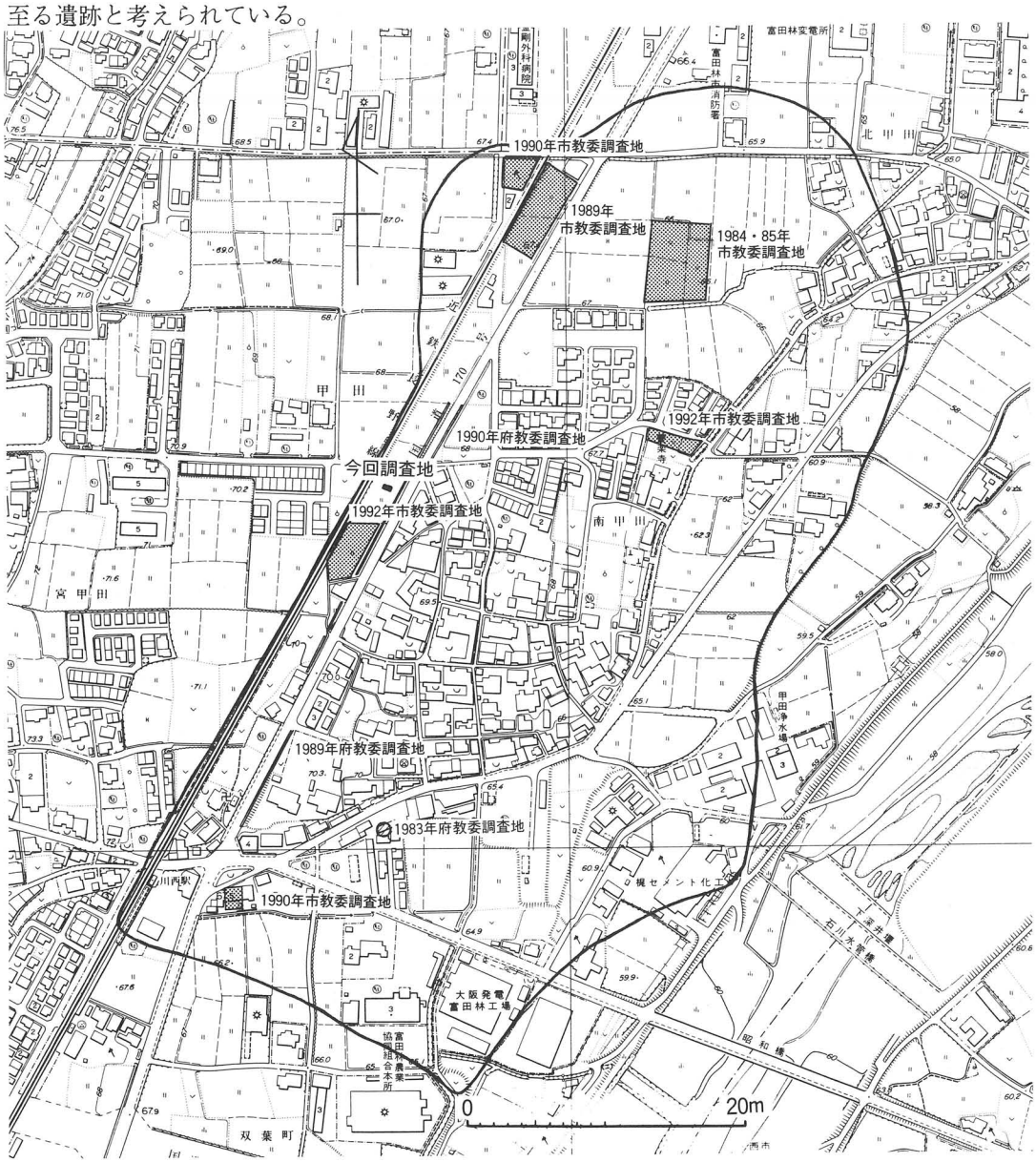
今回の調査地は、錦聖遺跡の南東端部、中位段丘の縁辺付近にあたる。調査地の北東方100mには、聖音寺があって、周辺一帯は、聖音寺山（しょんじやま）と地元では呼ばれている。聖音寺については、詳細なことは分からないが、調査地周辺の過去の発掘調査から、中世には確実に集落があったことがわかる。

錦聖遺跡の北部には、白鳳期の細井廃寺があるものの、この周辺については、市街化調整区域であるため、本格的な調査の日の目を見ていないのが現状である。しかし、今回の調査地を含む遺跡南東部の状況がしだいに明確になってきている。今回出土の遺物から、遺構の年代を１５世紀に比定できる意義は大きい。

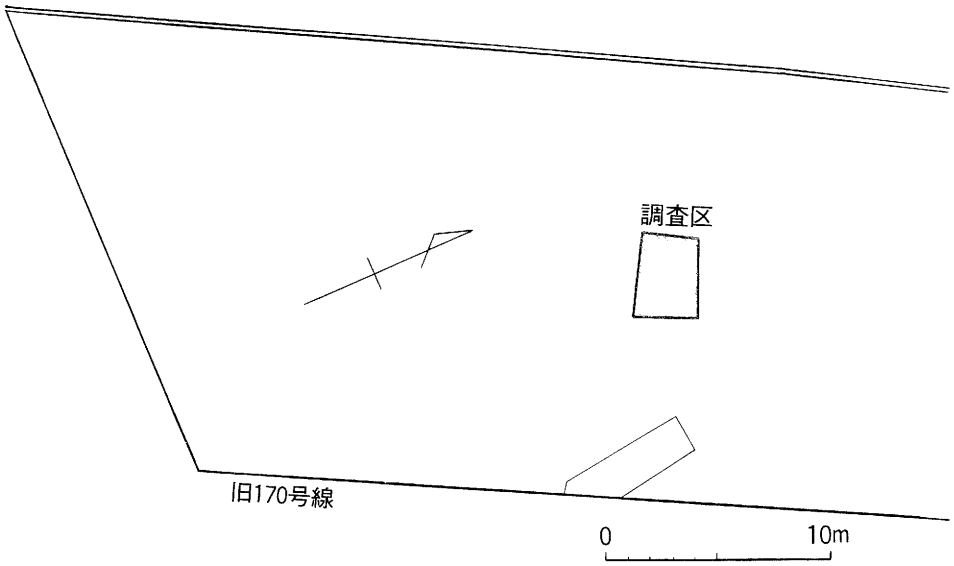
（中辻）

Ⅵ．甲田遺跡

甲田遺跡は、市域のほぼ中心に位置し、市内中央を流れる石川西岸の低位及び中位段丘に広がっている。具体的には、東はほぼ石川の護岸まで、西側は近鉄長野線、北側は富田林市消防署付近、そして南側は近鉄川西駅の南までである。過去の発掘調査により弥生時代から中世に至る遺跡と考えられている。



挿図２５　甲田遺跡発掘調査地位置図



挿図２６　調査地位置図

ＫＤ９３

調 査 地：富田林市甲田４４６－４

調査面積：9.25㎡／710 ㎡

調査地は中位段丘上にあって、近鉄長野線川西駅の北方約３５０ｍ、旧国道１７０号線と近鉄長野線に挟まれた場所である。現況は水田である。

共同住宅建設に伴うもので、建物予定地については遺構保存を前提として、調査対象を浄化槽部分とし、平成５年１２月２４日から同月２７日まで、東西３．７ｍ、南北２．５ｍの範囲を人力掘削により発掘調査を実施した。

１．層 序

地表面から４５cmで地山が現れる。層序は上から順に耕土(１７cm)、床土（４cm)、灰黄色土（３cm)、黄灰色土（３cm)、濁灰黄色土（４cm)、濁黄灰色土（４cm)、暗灰黄色土（８cm)、黄色土（２cm）が堆積する。

２．遺 構

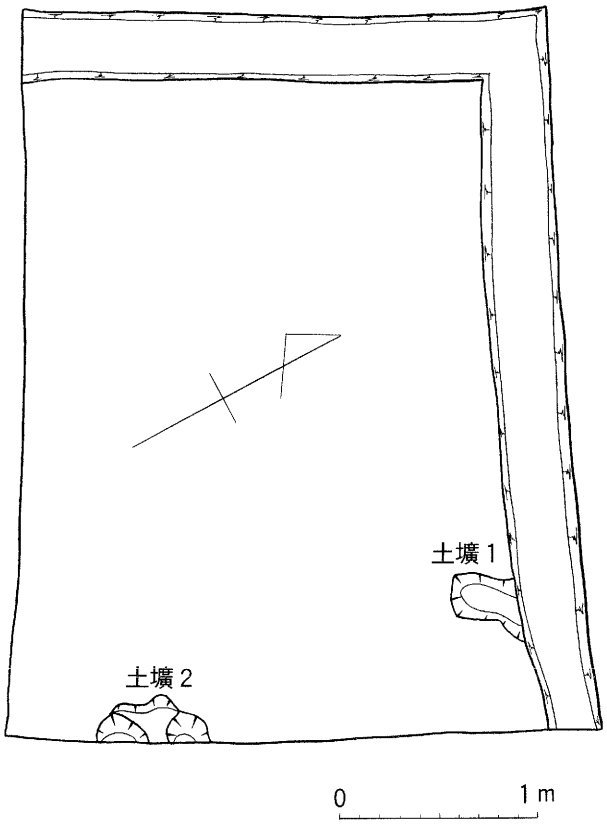
土壙２を検出した。

土壙１

調査区北東部で検出した。平面形は不整形で、北端部分は側溝によって切られている。東西方向の径は、最も広いところで約３５cmを測り、深さは、約２cmを測る。遺物は認められなかった。

土壙２

調査区南東部で検出した。平面形は不整形で、遺構の東部分は東壁内のため、正確な規模は不明である。東壁での径は約６０cmで、深さは約３cmを測る。遺物は出土しなかった。



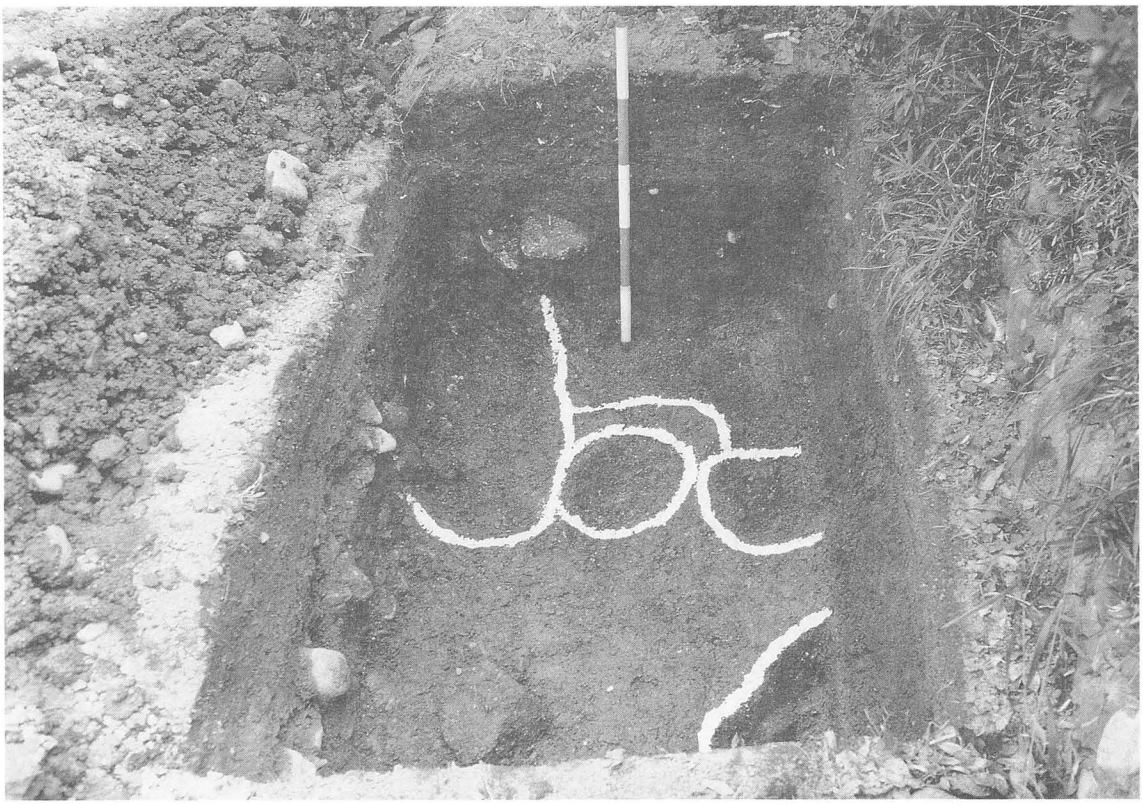
挿図２７　遺構平面図

３．まとめ

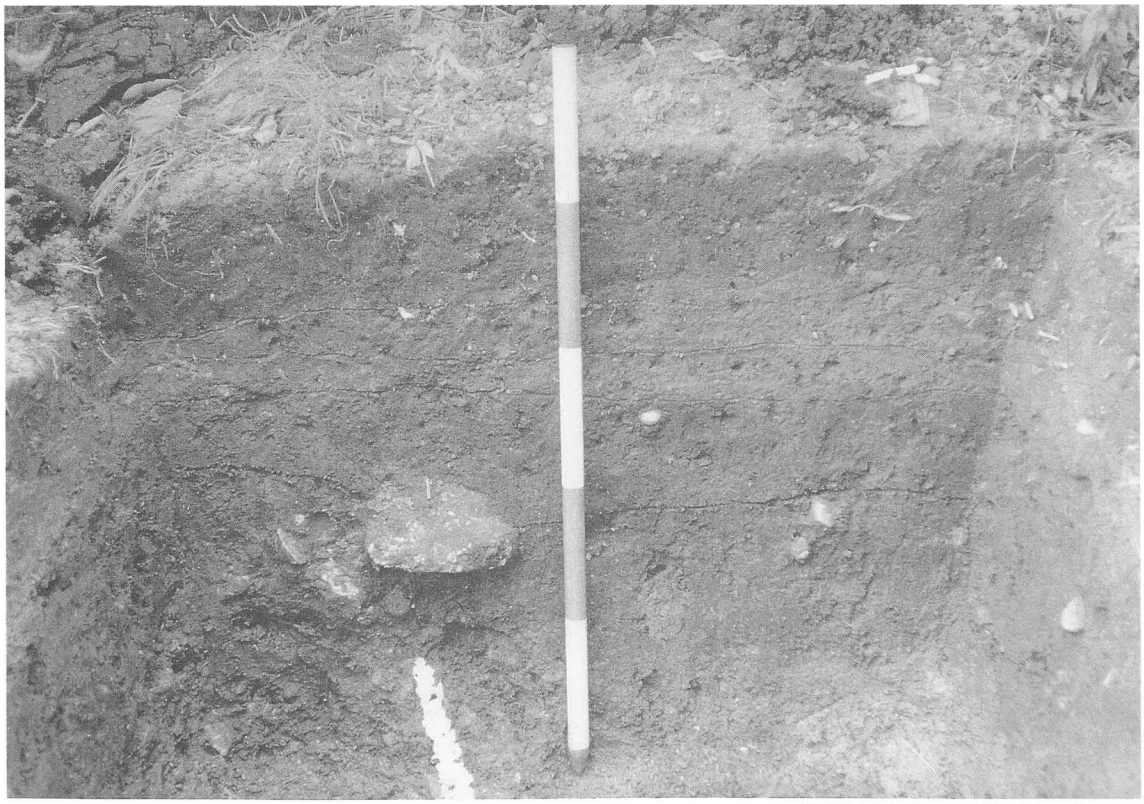
今回の調査では土壙を２基を検出するのみにとどまった。しかし、堆積層からみて水田面が４面存在することが確認された。また、事前の確認調査では、地表下およそ４０cmに灰青色弱粘質土の層が南北に薄く、溝状に、深いところで８cmの厚さで堆積していることを確認している。この溝状遺構から、須恵器と土師器が出土した。これらの遺物から、この遺構は中世以前のものと考えられる。過去の甲田遺跡の調査では、調査区の東方に位置する現南甲田の集落辺りに奈良時代の集落跡があると推定されており、これらとの 関連性を考えるうえで非常に興味深い資料と言える。ただし、今回の調査区で検出した土壙は、おそらく旧水田に伴うものと思われる。

（今西）

図　　版

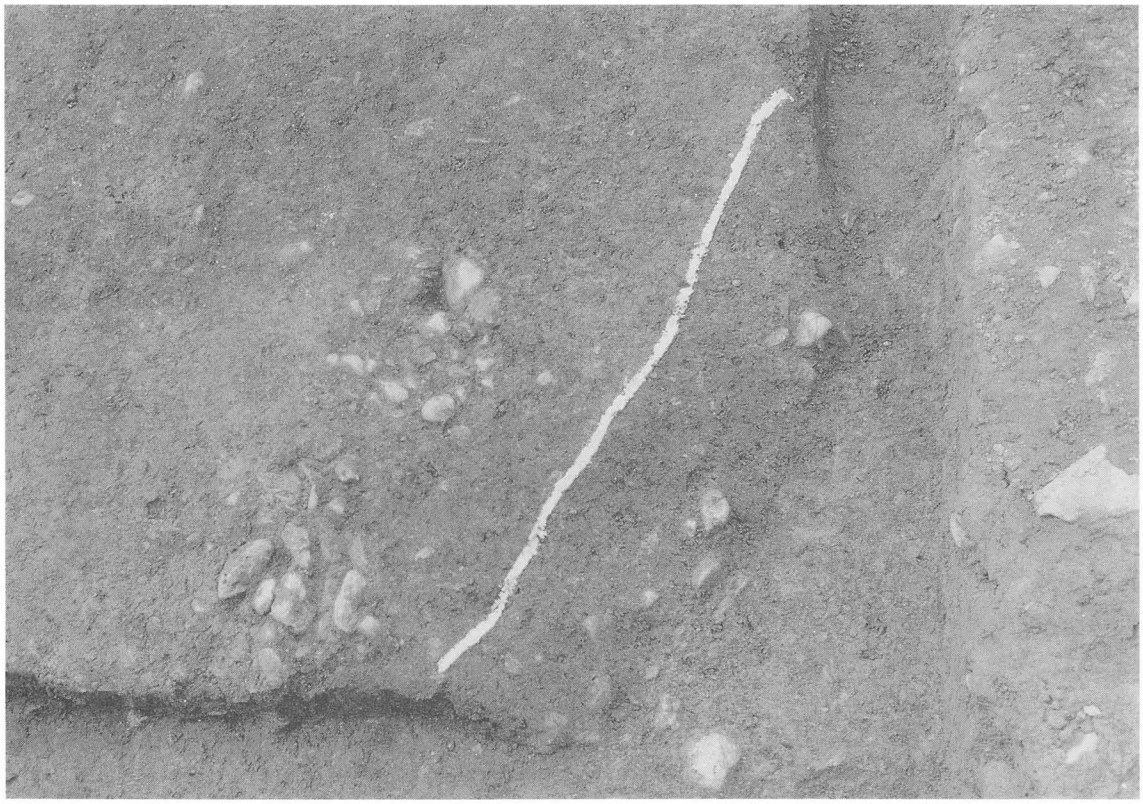


錦織南遺跡　調査区全景　南から

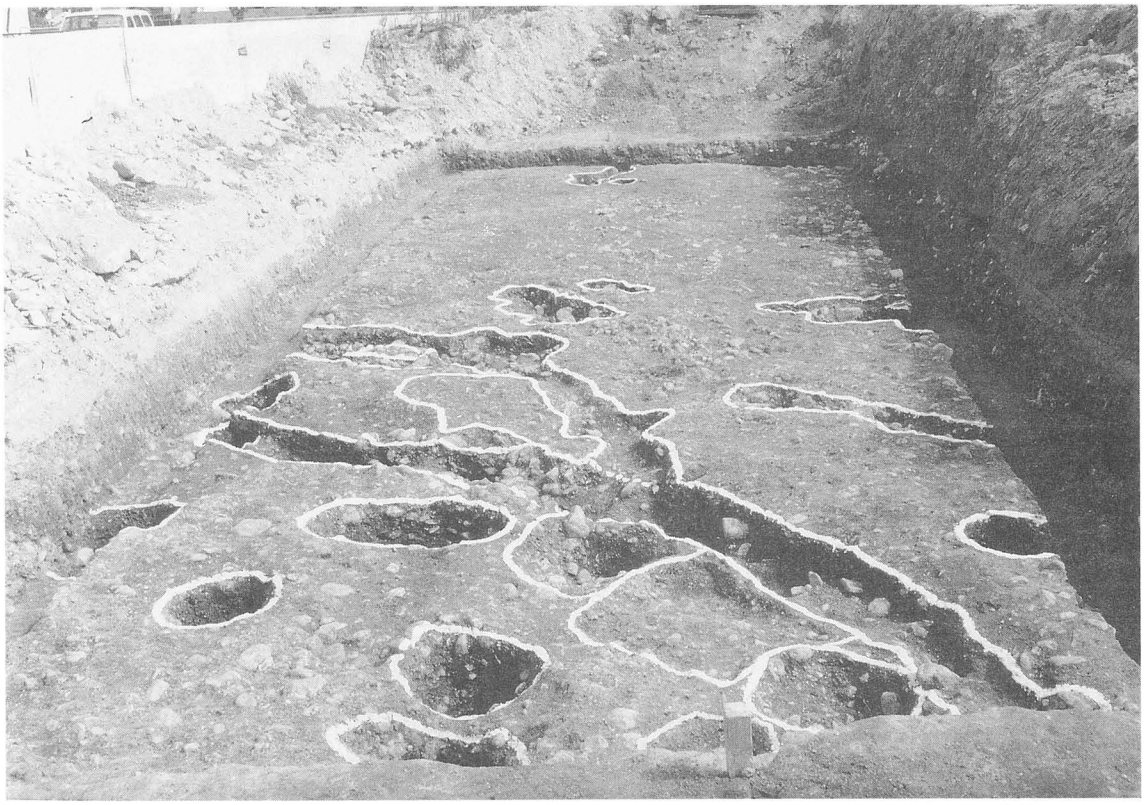


錦織南遺跡　北壁断面　南から

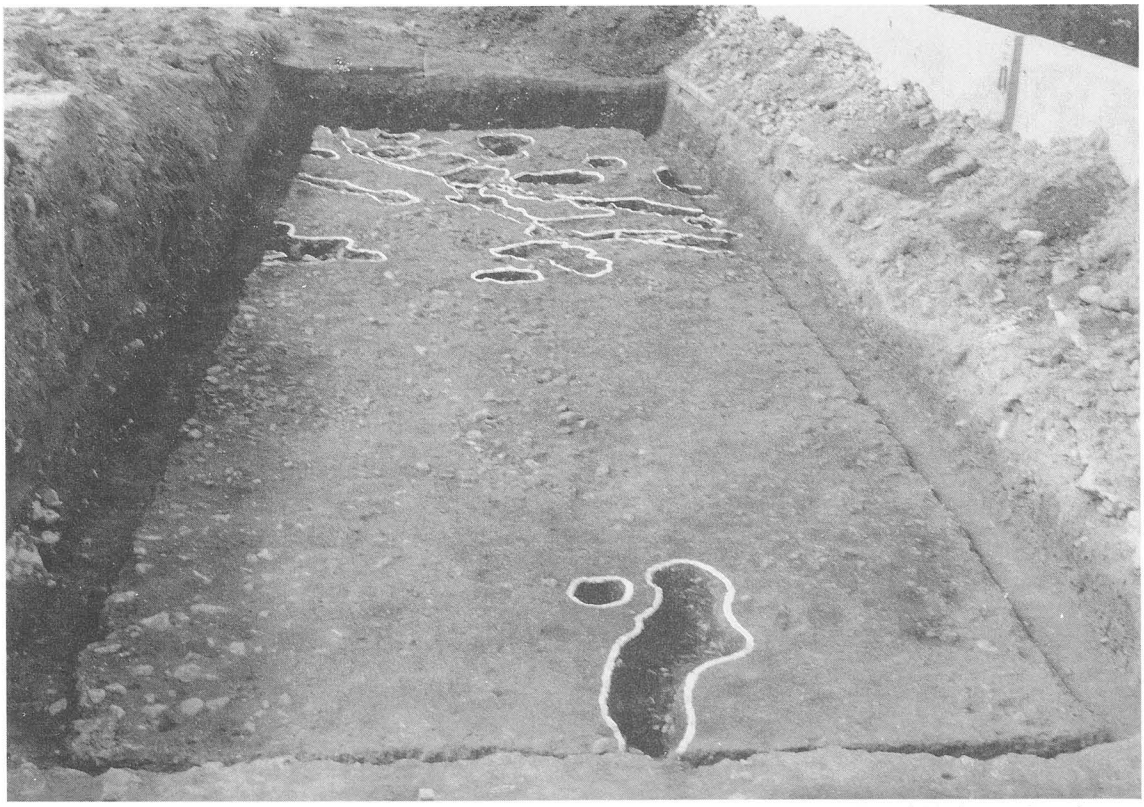
甲田南遺跡　第１面土壙全景　西から



甲田南遺跡　同上　南から

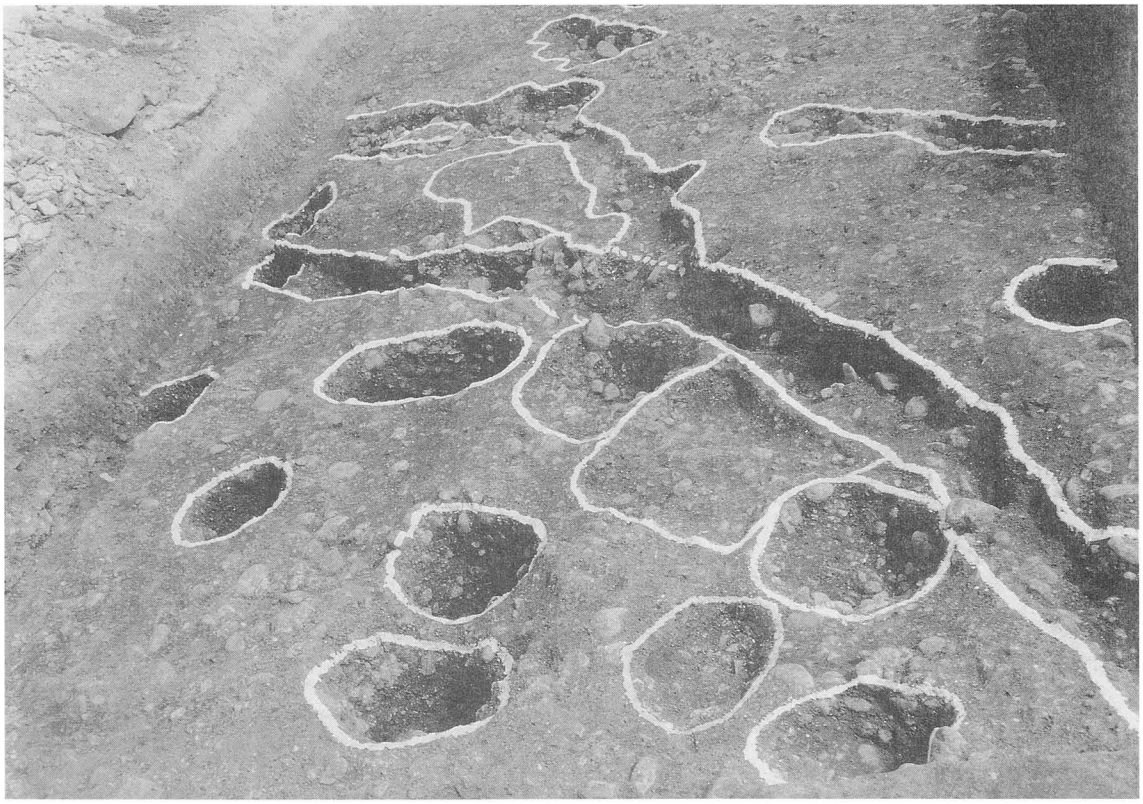


甲田南遺跡　第２面全景　西から

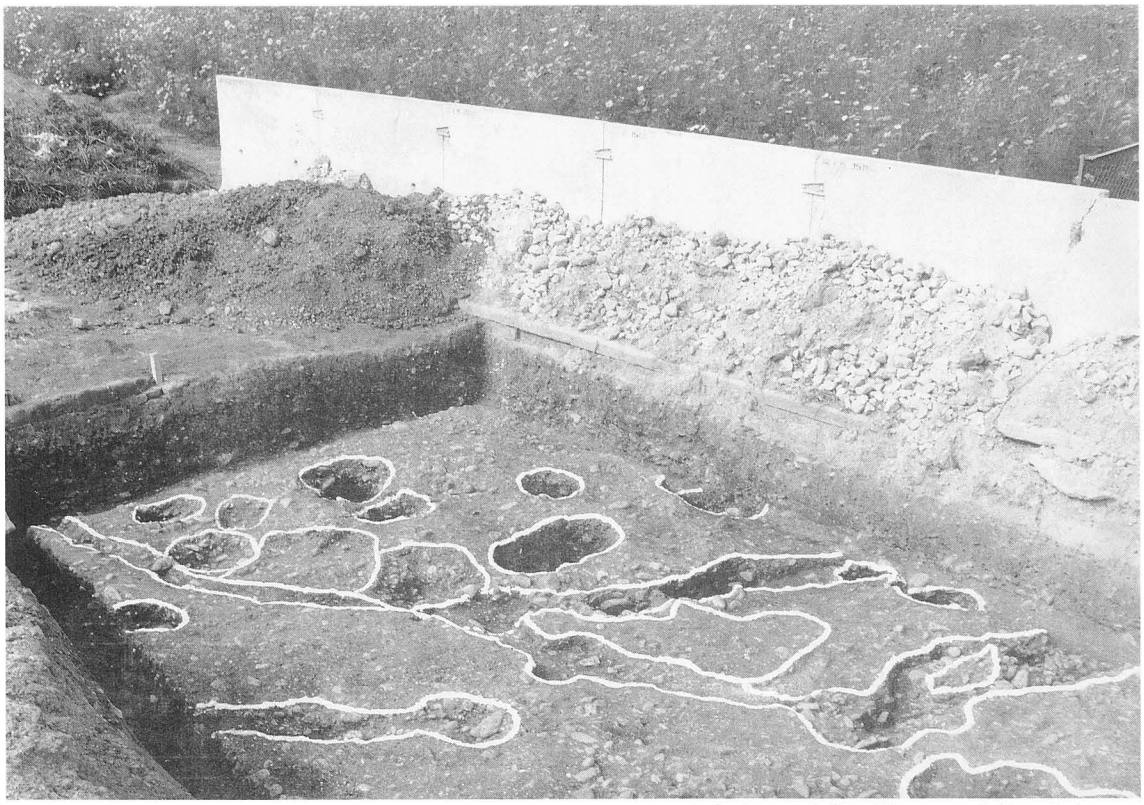


甲田南遺跡　同上　東から

甲田南遺跡　調査区西半部全景　北西から

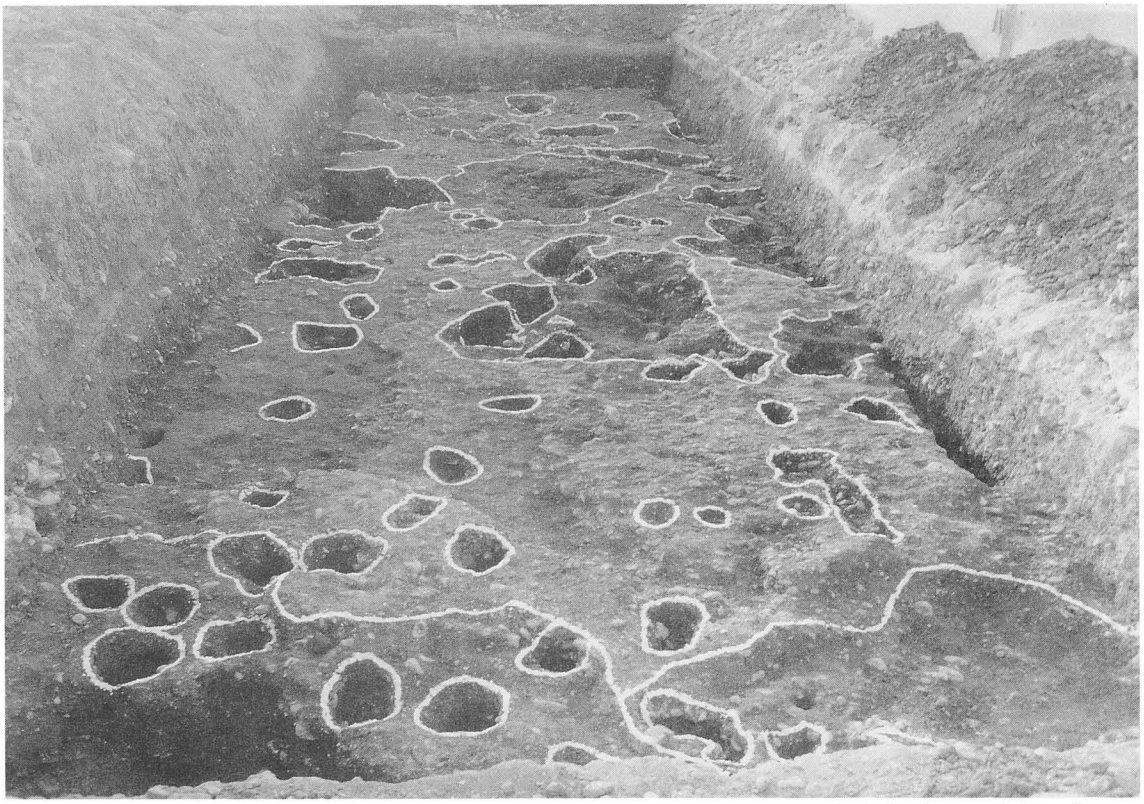


甲田南遺跡　竪穴住居址１、２全景　西から



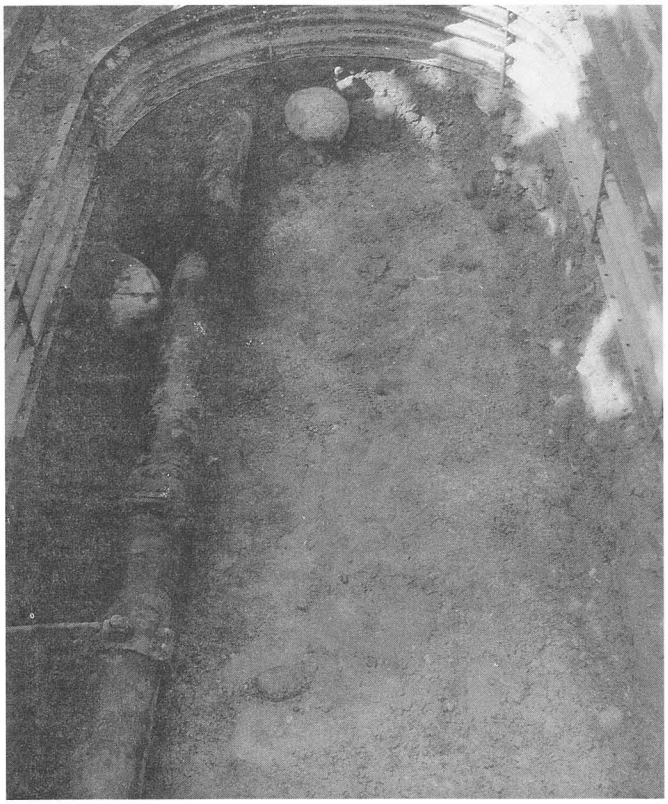
甲田南遺跡　竪穴住居址１、２全景　南東から

甲田南遺跡　板状鉄斧出土状況　西から



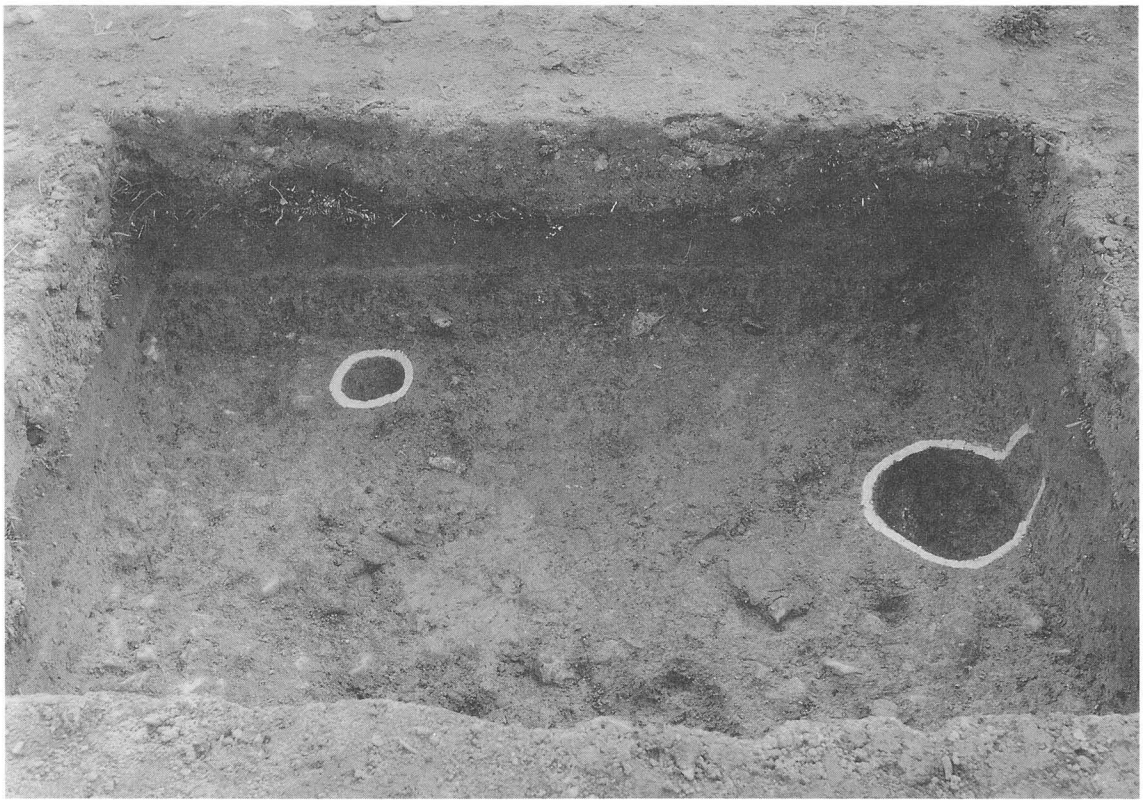
甲田南遺跡　第３面全景　東から

甲田南遺跡　同上　西から

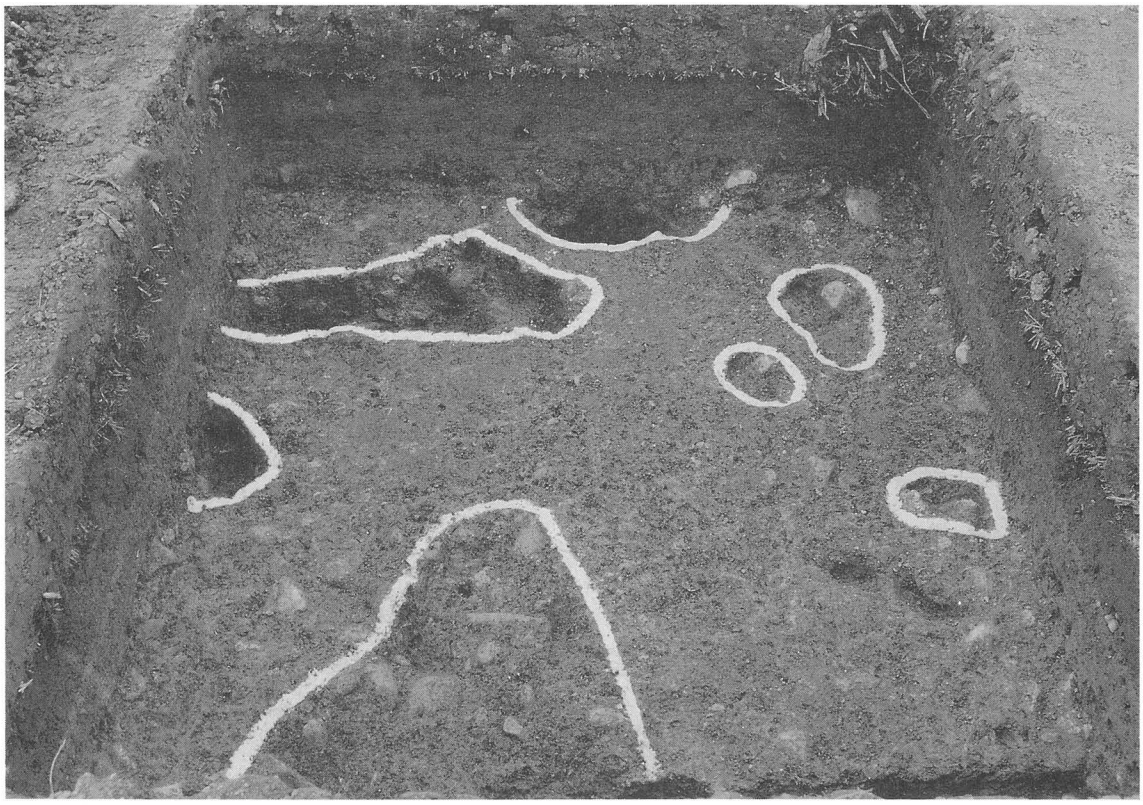


中野遺跡　調査区全景　南から

中野遺跡　北壁断面　南西から

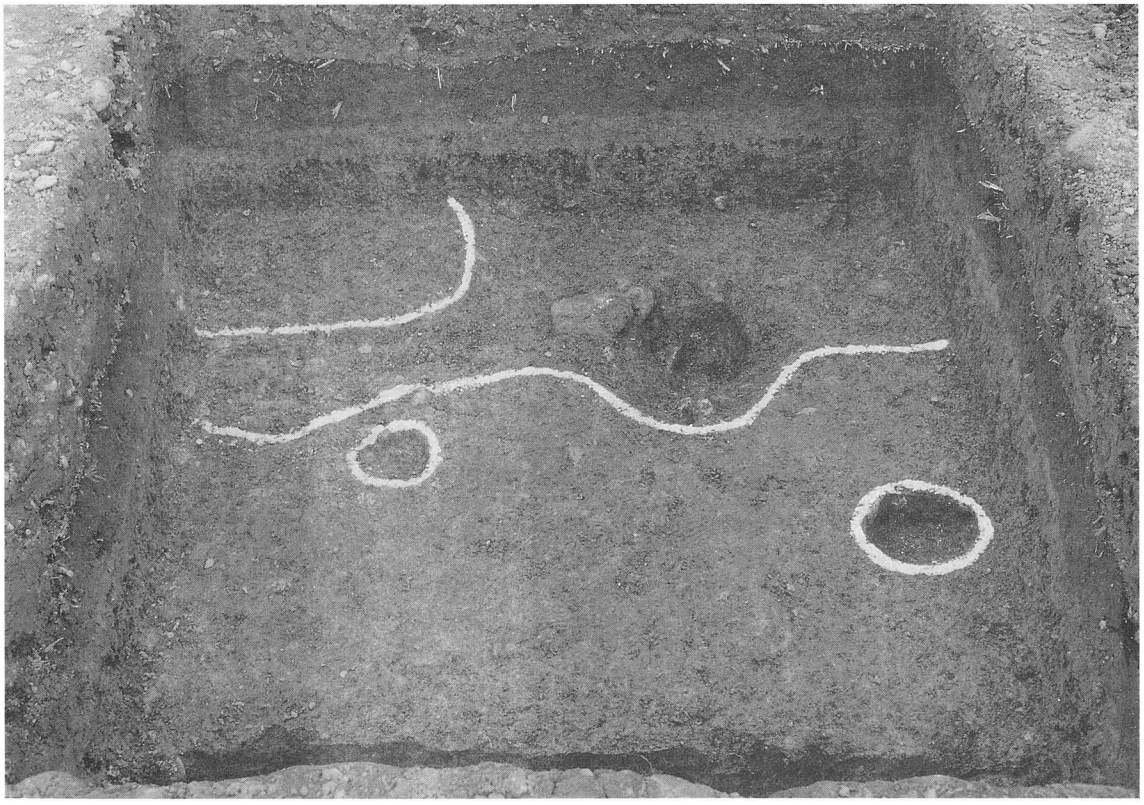


錦聖遺跡　第 3 トレンチ全景　北から

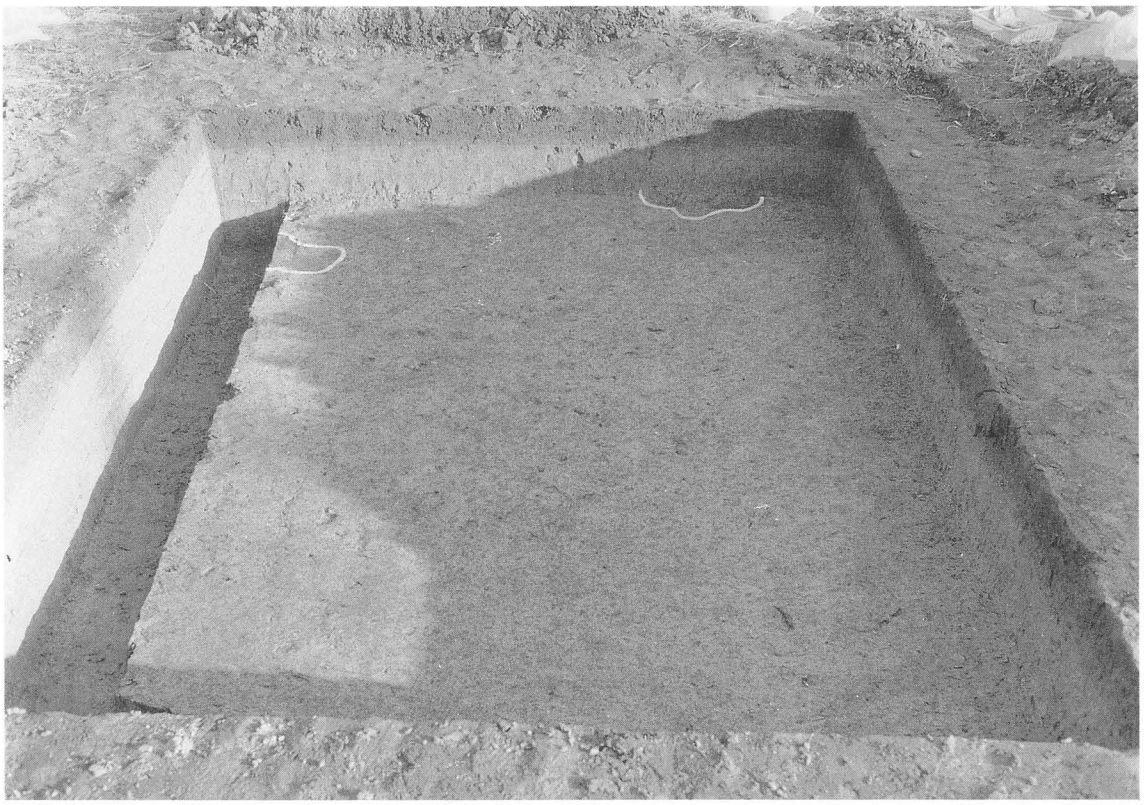


錦聖遺跡　第 4 トレンチ全景　東から

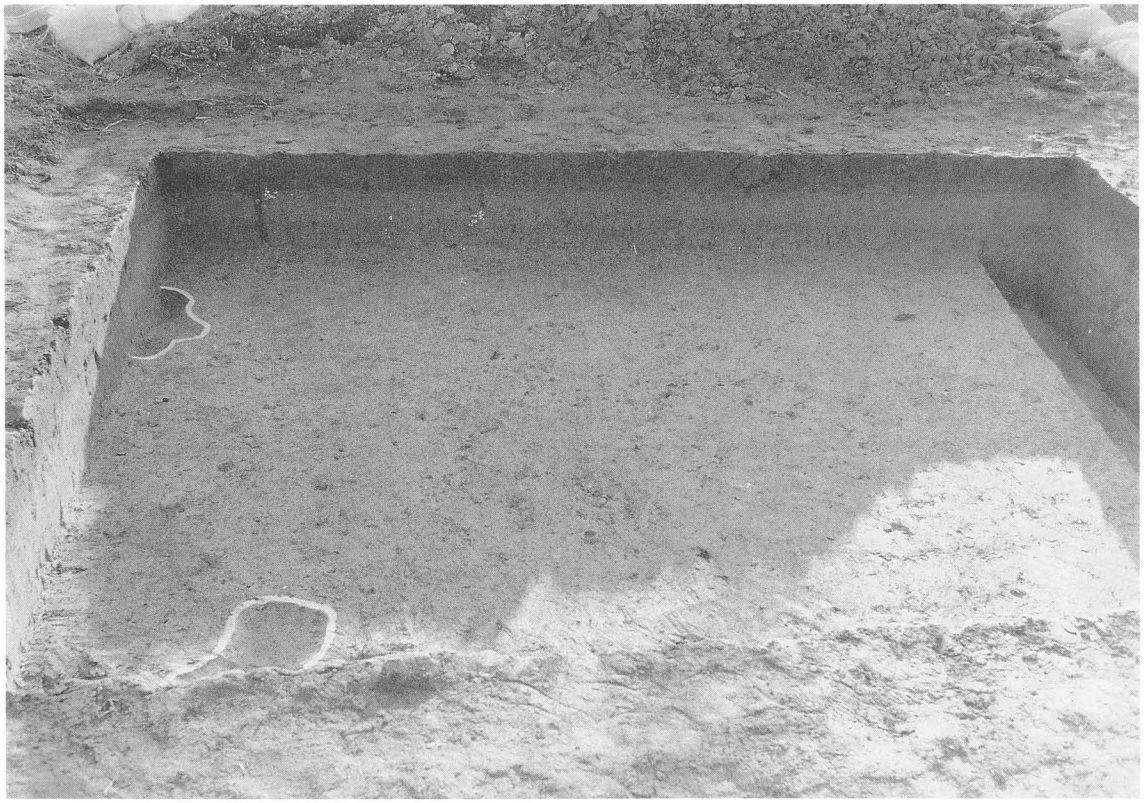
錦聖遺跡　第 5 トレンチ全景　北から



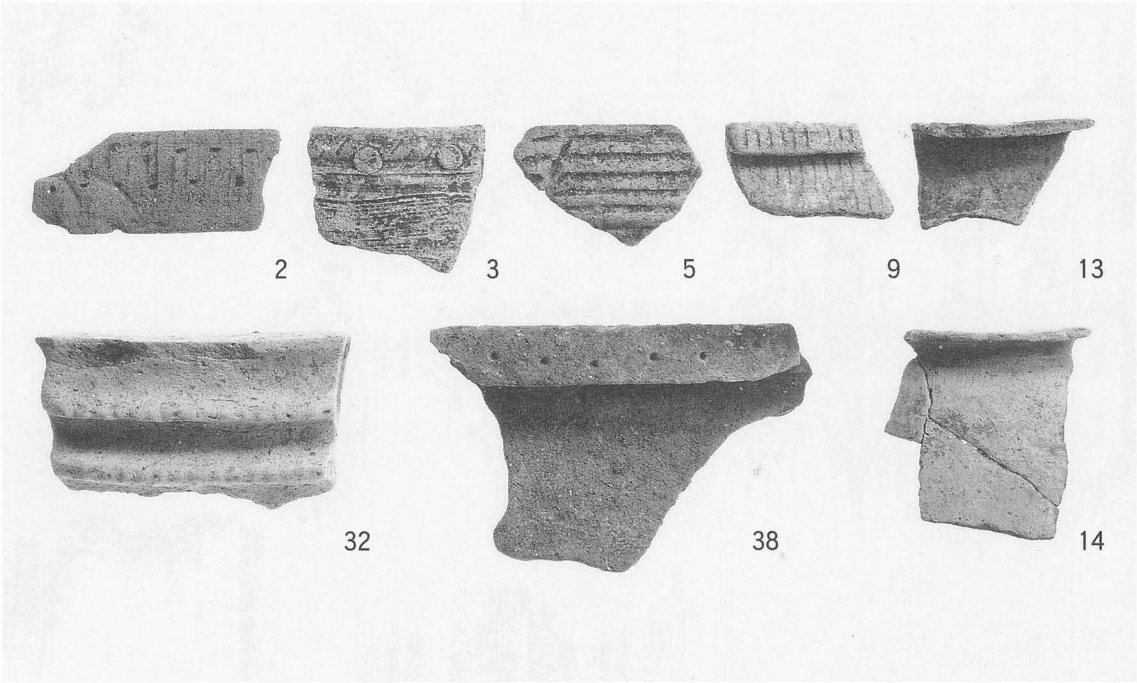
錦聖遺跡　第 6 トレンチ全景　西から

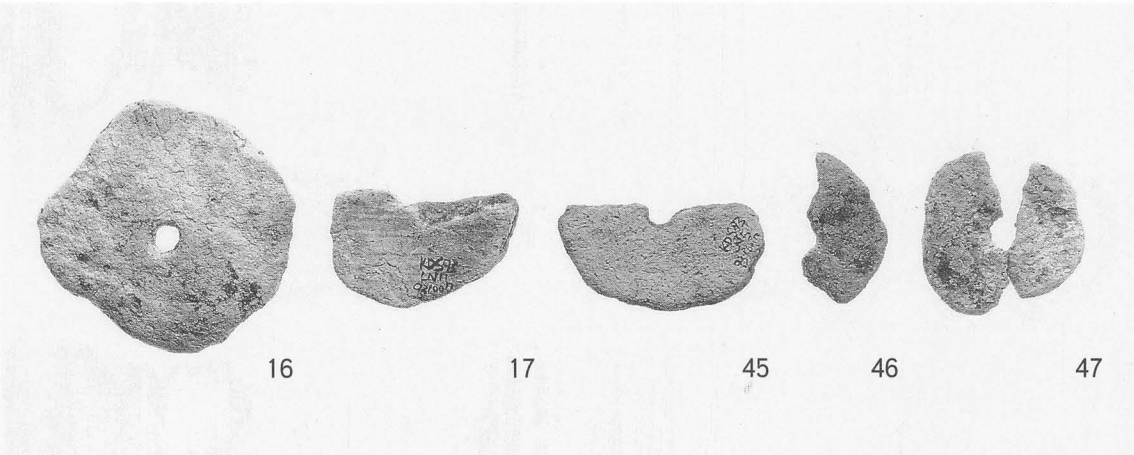


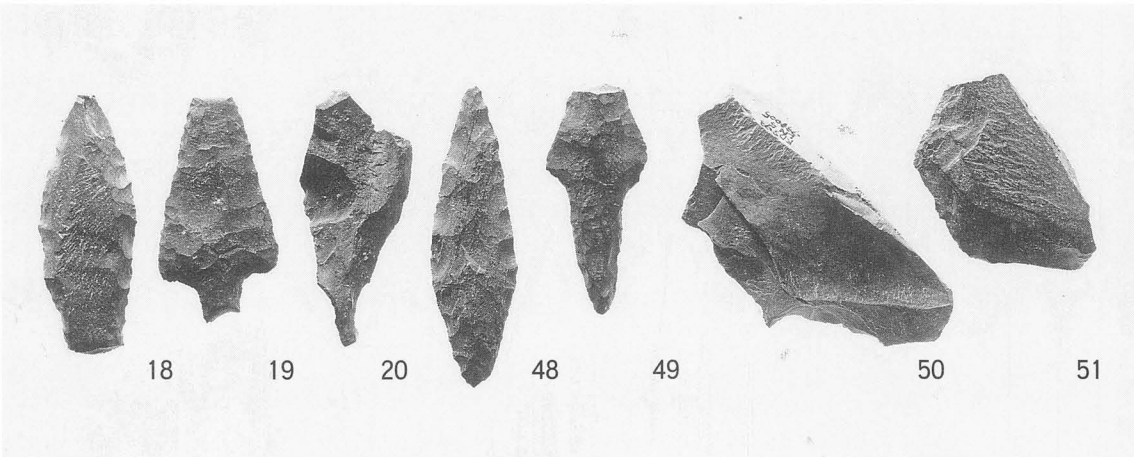
甲田遺跡　調査区全景　西から



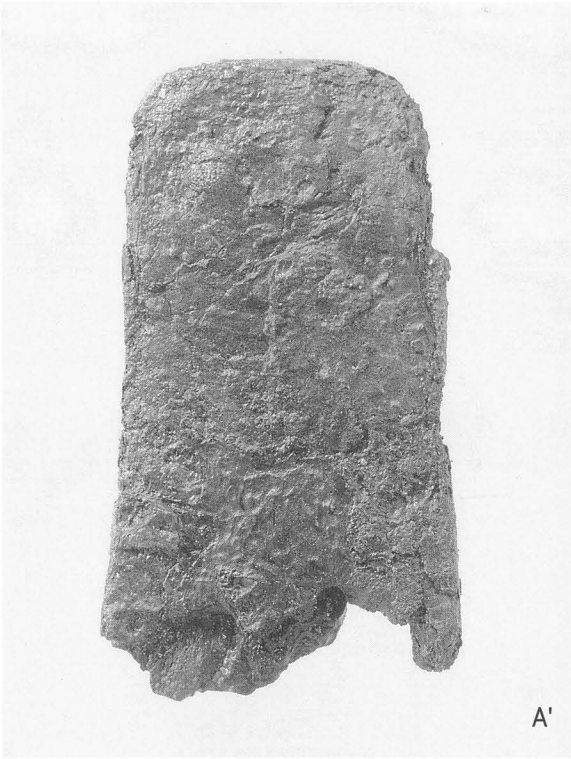
甲田遺跡　同上　北から

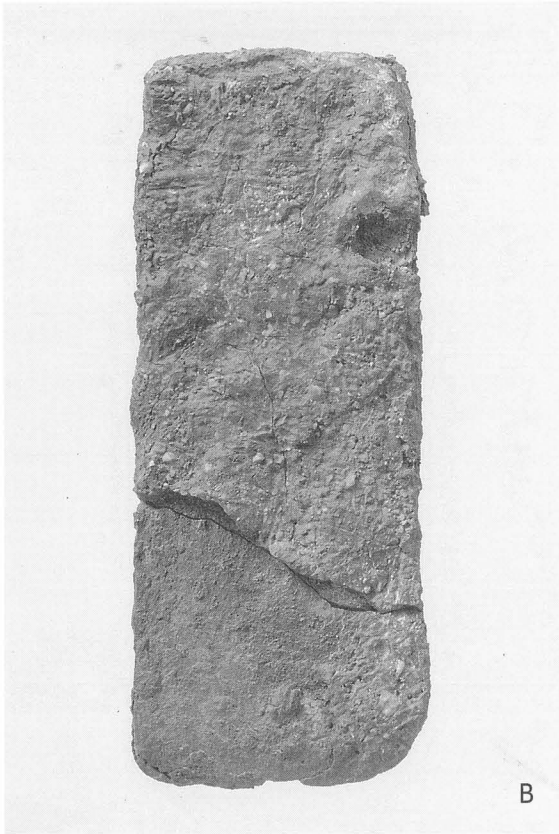




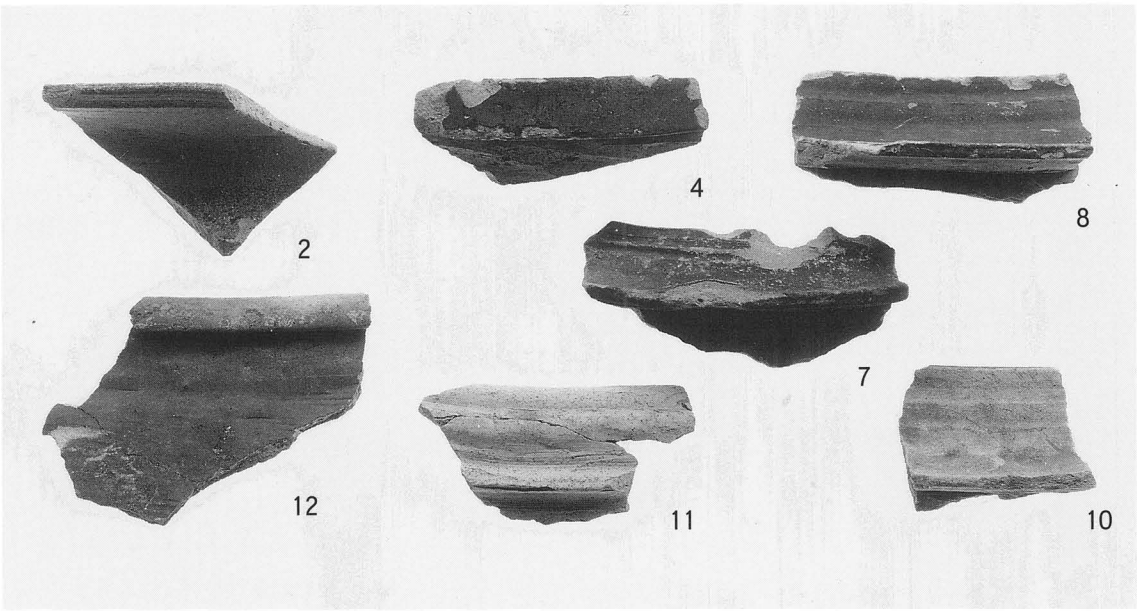


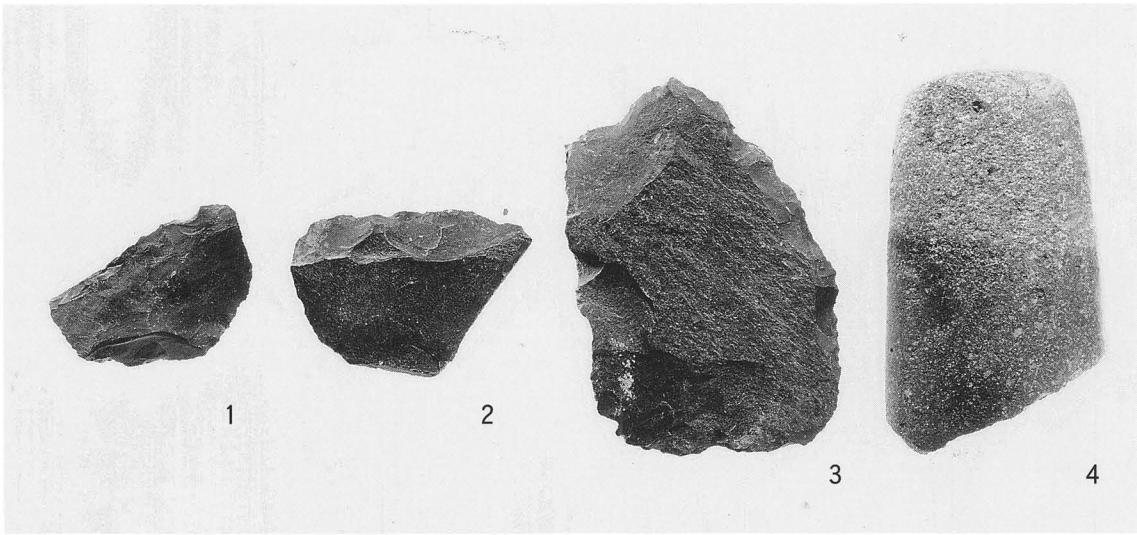
甲田南遺跡出土遺物

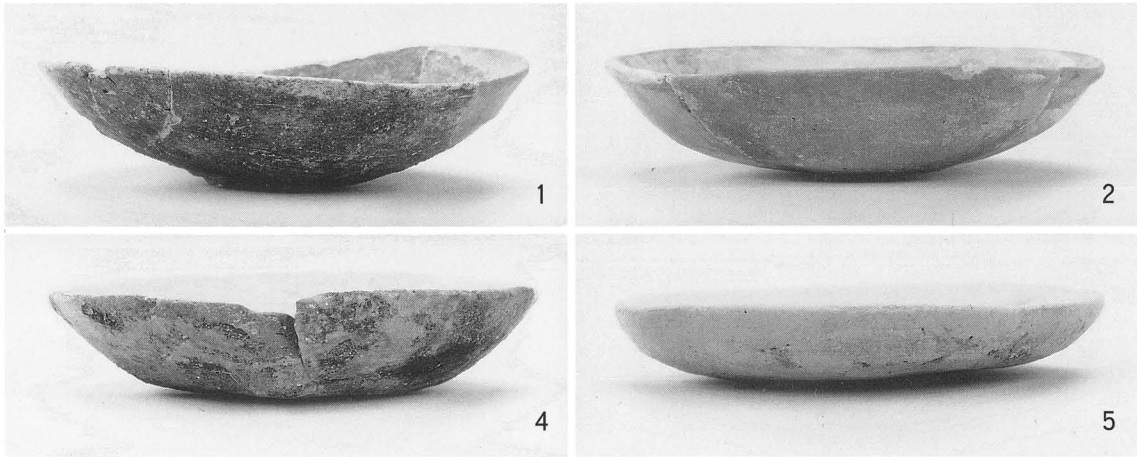




甲田南遺跡出土鉄斧







中野遺跡・錦聖遺跡出土遺物

富田林市埋蔵文化財調査報告24

発行年月日　1994年３月31日
編集・発行　富田林市教育委員会
住　　所　富田林市常盤町１番１号
印　　刷　橋本印刷株式会社

1994. 300